『銃男爵　第一部』

一．回顧

平成二十三年。スペイン・バルセロナ―。

その郊外にあるモリェト五輪記念射撃場のクラブハウスの玄関前は、多くのマスコミとファンでごった返していた。二十年前にここで行われたオリンピックの本番の時でさえ、これほどの人は集まらなかった。しかも、この日は正式なクレー射撃の試合ではなく、遥か極東にある国の為のチャリティ・マッチである。

彼らの目的は皆同じであった。試合を終えた男爵を出迎えようと、今か今かと待っているのだ。

しばらくすると、凄まじい歓声が沸き起こった。プレス用の共同インタビューを終えたお目当てのその男爵が、ハウスの玄関前に姿を現したからだ。

誰からともなくそのコールが始まり、やがて、大合唱となった。

「バ・ロ・ン、バ・ロ・ン！」

コールマン型の口髭をたくわえた精悍な風貌のその王者は、両手を挙げてその大声援に応える。堂に入ったその仕草には、誰もが認める絶対王者の風格がみなぎっていた。

隣にいる通訳を兼ねた女性秘書に急ぎマイクが渡されると、彼は観衆に向かって話し始めた。

「親愛なるバルセロナの皆さん…」

場内は、水を打ったように静かになった。

「今日は私の母国の支援の為に集まってくれてありがとう。ご存知のように、今、私の母国では大震災の復興の為に全力を尽くしています。皆さんから頂いた善意は、きっと大きな励ましの力になると思います。日本の人々は、スペインの素晴らしい友人のことは決して忘れないでしょう！」

男爵の挨拶が終わると、再び場内は大歓声となった。

スタッフによって通路のスペースが作られると、すぐに握手攻めになった。多くの人が手にしているポロシャツやスポーツタオル等を差し出してサインを求める。それらには、男爵のトレードマークであるコールマン型の口髭を模したデザインのブランド・マークがついている。会場の一角でチャリティ用に販売された彼のブランドのグッズ類である。中には、自分が使っている競技用の銃にサインをせがむ者もいる。彼は、そのひとつひとつに丁寧に「バロン・コノエ」のサインを書き、礼を言って握手を交わした。写真撮影にも笑顔で気軽に応じた。

誰もが彼を愛し、尊敬していた。

このバルセロナだけではない。世界中のどこの会場においても見られる光景だった。それは、そのまま今のクレー射撃界の縮図であると表現してもよかった。すべてが、彼を中心に回っていると言っても過言ではなかった。彼は、前人未到の世界選手権八連覇を遂げた十七年間無敗の王者だ。唯一無二の絶対的王者だ。文字通り、不世出の偉大なプレイヤ

ーである。
やっと、ファンとの交流が一段落し、スタッフと迎えの車に乗り込もうとした時だった。
後ろから声をかけられた。
「男爵！」
振り返ると、小学生くらいの少年が笑顔で立っていた。
その後ろにいる父親に連れて来てもらったのだろう。
男爵は少年の前に歩み寄ると、長身を折り曲げてその少年と同じ目線になるように腰をかがめた。女性秘書も、あわててその隣りで同じ姿勢になる。
「何だい、坊や。私に話があるのかい？」
男爵が、包み込むような優しい笑顔で訊ねる。
「はい。男爵に質問があります」
「うん。言ってごらん」
「はい。僕も大人になったら、クレー射撃の選手になりたいと思っています」
「ほほう、それは嬉しいな」
「どうしたら、男爵のような偉大な選手になれますか？」
子供らしいストレートな質問だった。
その無垢で真っすぐな瞳がまぶしかった。
「ははは…、これは難しい質問だな。私が今まで受けた中で、一番難しい質問かもしれないな」
半分おどけてみせてから、男爵は少年のその瞳をじっと見つめた。そして、答えた。
「皆には内緒だけど、君だけにはそっと教えてあげよう…。銃とお話をするんだ」
「えっ。銃とですか？」
「そうだよ。お話をするんだよ」
「でも、銃は…」
「うん、そうだな。勿論、銃は話すことができない。だから、心で話すんだよ」
「心で…？」
「そう、心でだ。それができた時、きっと君は偉大な選手になれるだろう。ちょっと難しいかもしれないが、やってごらん」
「はい、やってみます。心でお話ができるように一生懸命練習します。ありがとうございました！」
「うん。頑張りたまえ」
そう言って、男爵は少年の頭を撫でてあげた。
「今回の分の義援金は、イタリアの事務所のラファエラさんのところに送金すればよろしいですか？」
車に乗り込んだ男爵に、女性秘書が訊ねた。
「いや。東京の事務所の方にお願いします。今回のチャリティ・イベントはアリッサが窓口になっていますので」
「男爵の娘さんの？」
「ええ。この件のマネージメントはすべて彼女に任せています」
東日本大震災の復興支援については、日本に居る娘の亜里沙が心骨を注いでいた。

「かしこまりました」
女性秘書が手際よく現地のスタッフと今後の段取りを行った。
じきに、車はバルセロナの中心部にある宿泊先に向かって走り出した。
男爵は車窓の外の景色を眺めた。カタルーニャ地方の長閑な田園風景が続いていた。
「男爵。私、感激しましたわ」
手配を終えた女性秘書が、感慨深げに話しかけてきた。
「うん？　何のことだね？」
「あなたは、あんなに小さなファンも大切にされるのですね」
さっきの少年にとった彼の行為に、彼女は感激していた。
「小さいから、なおさら大切にするのですよ」
「でも、実際にあの子がクレー射撃を始められるのは、ずっと先のことですわよね」
「確かに、君の言う通りかもしれません。本物の銃を使って競技をするクレー射撃はサッカーのような他のスポーツとは違って、大人にならないとできないものですからね」
「ええ。ですから、なおさら感激しました」
「ははは…。それは、どうもありがとう」
礼を言った男爵は、再び車窓に目をやった。
「ただ、物事には、時に例外もあるがね…」
そう呟くと、彼は深く目を閉じた。

二．例外的少年(1)

昭和三十九年。福島県いわき市小名浜―。
歓楽街の路地裏。
ガシャーンと、大きな音を立てて壁際に積んであったビール瓶の木箱が崩れ落ち、殴られた男が地面に吹っ飛ばされる。
それでも、二人の男達は容赦がなかった。地面に倒れた男の体を執拗に蹴りあげる。
「お父さんを蹴らないで！」
駆けつけた少年が、必死になって蹴る男の足にしがみついた。
「どけ、坊主！」
払いのけられたその少年はすぐに起き上がって、今度は地面に倒れている父親の上に覆いかぶさり、再び男達に哀願した。
「やめて、もう蹴らないで！」
「ちっ。邪魔だ、どけ！」
さすがに、男達も蹴るのをためらった。
身を挺して、必死に父親を守ろうとする少年は、まだせいぜい中学生くらいだった。
「もういい、その辺にしておけ」
後方で見ていた別の男が二人に声をかけた。凄味のある声だ。
「へい！」その男に命じられて、男達は引き下がった。
電燈のない路地裏の暗がりでは、命じた男の顔はほとんど見えない。路地の入口の角に

ある店のネオンサインが、辛うじてその男の体の輪郭を照らし出していた。肩幅が広いがっしりとした体格だ。
「坊主。年はいくつだ？」
見下ろしたその男が、少年に訊ねた。
「十一歳です」
「なんだ。まだ、小学生か？」
「そうです。おじさん達は何で、お父さんにこんな酷いことをするんですか？」
「何で、か。くくくっ…。理由が聞きたいか？」
顔を上げて笑った時、その男の右の頬にある大きな傷が点灯するネオンに照らし出された。
以前、刃物で受けたであろう深く長い傷だった。だが、それを見ても少年は怖気づかなかった。男に負けないくらいの眼光を放ちながら、こくりと頷いた。
「なかなか、胆の据わった坊主だな。いいだろう、教えてやろう。盛り場には、盛り場のルールってもんがあるんだ。おまえのお父さんも、俺達も同じそのルールの中で生きているんだ。で、お父さんはそのルールを破った。だから、罰を与えたのさ」
「ルール…？」
子供の理解を超えた説明だった。
「合点が行かないようだな」
頬に傷のある男は、少し困ったようなニヒルな笑いを浮かべた。
「くくくっ…。まあ、いい。もう、お父さんを蹴ったりしないから、ちょっとだけそっちへ行っていろ」
そう言って傷の男が少年を父親から引き離すと、そのまましゃがみこんだ。
倒れたままの父親の耳元で宣告する。
「俺は、鏑木吾郎って者だ。あの店は俺が面倒を見ている店だ。どこの流れ者か知らんが、今後は俺に無断で商売するんじゃねえぞ。本来ならその右手を潰していくところだが、あの肝がすわった坊主に免じて、今日のところは勘弁してやろう。だが、今度やったらこんなもんじゃ済まねえからな。わかったな？」
「わ、わかりました」
父親が、声を絞り出して了承した。
「もういいぞ。お父さんを大事にしろよ。じゃあな、坊主」
そう言うと、鏑木五郎は手下を従えて去って行った。
「お父さん、大丈夫？」
少年が、心配そうに父親の傍らに走り寄る。
父親が、よろよろと起き上がった。
「ううう…」
だが、脇腹を押えて呻きをあげながら、再びうずくまる。
「お父さん！」
「大丈夫だ、慎一郎」
「お医者さんに行く？」
「いや、大丈夫だ。肋骨はやられていないようだ。何とか歩けそうだよ」

何とか立ち上がると、父親は思い出したように辺りを見回す。
慎一郎と呼ばれたその少年は彼が何を探しているのかを分かっていた。
「はい、お父さん。これでしょ？」
慎一郎が、店の裏口の脇に放り出してあった細長い皮製のケースを拾って戻ってきた。
「そうだ、これだ。助かったよ。こいつがなけりゃ、おまんまの喰い上げだ」
父親は、ケースの留め金を開けて中身の無事を確認した。
中には二本に分解されたビリヤードのキューが収められていた。
近衛慎作は、賭けビリヤードのプロだった。
慎作は安堵してケースを閉じると、ヨロヨロした足取りで歩き始める。
「鏑木吾朗か…。くそっ、想像以上にタフな奴だったな…」
暗がりの路地から賑やかな明るい表通りに出た慎作は、思い知ったように呟いた。
福島県の最南端に位置するいわき市小名浜。この街は、元来の水産業に加えて臨海鉄道や大型工場がある為に、貨物港としても東京オリンピックの景気の勢いをそのまま享受して栄えていた。更に、すぐ裏の山間部には温泉街を配していたこともあって、特にこの歓楽街は活気に満ち溢れていた。
一年ほど前に、九州からやってきた慎作の読みは的中した。好景気をそのまま反映して、ここの客の金離れはかつてないほどに良かった。この一年間、地元民や温泉客をカモにして慎作は荒稼ぎをしてきた。面白いように儲かった。
だが、彼は調子に乗り過ぎてしまった。そのままビリヤードの賭け師に徹しているべきだった。彼はより多くの儲けを得る為に、店そのものの権利を買おうと画策したのだ。そうなると、街を縄張りにしている地元の「管理者」が黙っているはずがなかった。歓楽街で正式に商売をやるとなれば、それなりの「筋」を通す必要があるからだ。即ち、縄張りの主に「管理料」を上納しなければならないのだ。それは、古今東西、歓楽街での変わらぬ裏のルールであった。
そのことは、慎作も充分過ぎるほどわかっていた。だが、彼はあえて強行した。小名浜の地廻りを舐めていたからだ。今まで、何度か吾朗の子分達が件のビリヤード店に出入りしているのを見た時に、たいしたことがない連中だと思っていたのだ。日本中の地廻りの類の連中を見て来た慎作は、経験上そう判断していた。あの程度の子分をかかえる組ならたいしたことがないと高をくくっていたのだ。だが、それは見込み違いだった。親分の鏑木吾朗だけは、想像以上の武闘派だった。
「痛ててっ！」
慎作は、寝床の上で脇腹を抑えながら顔をゆがめた。
小名浜の歓楽街の外れにある簡素な共同住宅に何とかたどりついた慎作は、脇腹に氷嚢を当てながら思案していた。地元の顔役に目を付けられた以上、もはや選択肢は二つしかなかった。鏑木吾朗に詫びを入れ、上納金を納めてこの街に留まるか、それともこの街を出るか、のどちらかだ。
大きな方向性については、意外とすぐに結論が出せた。この街は出ることにしよう。あの鏑木吾朗のような荒くれ男に頭を下げるのも、上前をはねられるのも我慢がならなかった。だが、ビリヤードの賭け師の仕事からも足を洗おうと思った。
ちょうど、潮時なのかもしれないと感じていた。

体力的にも、日本中を放浪するのは辛くなっていた。気力の面でもビリヤードの賭けで生計を立てるのは厳しくなっていた。いまや、東海道新幹線が開通し、高速道路がどんどん整備されている世の中である。戦後の荒廃した姿は跡形もなく消えようとしている。それと共に、自分のやっているような稼業もどんどん行き場を失っていくに違いない。もう、そういう時代ではないのだ。当面は、経験を活かしてビリヤードで食べて行くしかない。だが、それは放浪する賭け師としてではなく、自分の店を持って腰を据えて商売するということだ。何よりも息子の慎一郎の将来のことを考えると、いい加減どこかにきちんと落ち着く必要があった。

慎作は、天井から視線を自分の隣りに移した。傍らでは、慎一郎がぐっすりと寝入っている。まだ十歳そこそこの子供に、修羅場を経験させてしまった。自分は、最低の父親だと自責の念にかられた。気にはしつつも、今日までずるずるとこんな生活のままで来てしまった。だが、今夜の一件でさすがにこのままではいけないと痛感した。この子の為にも今の稼業から足を洗い、まっとうな生活基盤を作らなければならないのだ。

慎作は、蹴り出された毛布をかけ直してやってから、しばらく息子の寝顔をじっと見ていた。彫りの深い顔立ちは、まちがいなく母親似であった。美しい女だった。だが、気性の激しい女でもあった。結局、彼女は慎作の不安定で将来性のない稼業についていけずに幼子を置いて出ていってしまった。それ以来、慎一郎は笑わない子になってしまった。責任はすべて親の自分にある。なのに、それでも慎一郎は鏑木一家に蹂躙される自分を身を挺して守ろうとしてくれた。こんな最低の父親の為にだ。

慎作は涙を流しながら、改めて心に誓った。この子の為に身を粉にして頑張ろうと。

「それにしても…」

慎作は、ふと口にした。

あの時の慎一郎は、勇敢だった。子供特有の怖いもの知らずというのとは、また違うと思った。鏑木吾朗は、相手を震え上がらせるのが商売だ。大概の相手はそうなる。まして、子供であればなおさらなはずだ。だが、慎一郎は違っていた。その鏑木吾朗が、胆が据わっていると一目置くほどの眼光を返していた。それが母親ゆずりの血からなのか、それとも自分と一緒に日本中の大人の世界を渡り歩いてきたことからなのかは分からない。だが、物事に動じないこの素養は、男としていずれ何かの場面で戦いを迫られた時には大きな武器になるだろうと思った。

そうこう考えているうちに、やがて慎作も深い眠りに入っていった。

三．安住の地

翌日の昼、慎作達親子は一年近く住んだ小名浜の小さな共同住宅を引き払った。居を定めない身軽な親子にとって、引っ越しの身支度にはさして手間がかからなかった。

バスで国鉄の泉駅まで行き、常磐線の上りに乗った。だが、電車に乗っていたのは十五分足らずだった。降りたのは泉駅からわずか三つ目の大津港駅だった。

「お父さん。もう、降りるの？」

慎一郎が不思議そうに訊ねた。

「ああ、この駅でいいんだよ」
この町は、小名浜からは直線距離にして、せいぜい十数キロほどしか離れていない。だが、それで充分だった。そこはすでに、福島県を出て茨城県内に入っているからだ。だとすれば、鏑木吾郎の手の及ばない地のはずだった。この町は豊かな水産と鉱業、更に観光の資源に恵まれていた。そして、好景気に沸いていた。その評判は、隣りの小名浜にも漏れ伝わってきていたのだ。
「ここの町に住むの？」
「ああ、そのつもりだ」
「今度は、どのくらい？」
「そうだな。もし、商売がうまくいったら、ずっとだよ」
「商売って、賭け師ではなくて？」
「ああ、そうだ。賭け師ではない。今度は、ちゃんとビリヤードのお店を開くんだ」
「そうなんだ…」
それを聞いて、慎一郎は内心ほっとした。
ビリヤード自体は嫌いではないが、賭け師の仕事で放浪の旅をするのは嫌いだったからだ。
慎作は、両手に抱えた荷物を駅の預り所に預けた。預かり証の半券を受け取り、瓦屋根のこれといった特徴のない造りの駅舎を出た親子は、そのまま駅前の不動産屋へ直行した。店舗付き住宅を探す為だった。幸い、資金には困らなかった。手元に、充分に蓄えがあったからだ。
慎作はいい意味でプロ意識が高かった。たとえそれが世間的には認められていない職業であったとはいえ、仕事に関わる自己管理には徹底したものがあった。大金が手に入っても、すぐに貯金していた。酒や娯楽には決して溺れることはなかった。まして、競馬や博打などの他の賭けごとは強く戒めていた。それはすべて、職業ビリヤード師としてのコンディション管理の為だった。父親の職業が嫌で仕方がなかった慎一郎も、その点に関してだけは、慎作のことを尊敬していた。そのおかげもあって、慎作は稼いだかなりの現金を遊興に使ってしまわずに手元に残してあったのだ。
大津港の駅の周辺にはなかなか手ごろな物件がなかった。だが、意外なところにピッタリの条件の物件が見つかった。
「ここは、いいぞ。慎一郎！」
「うん。潮の香りがするし」
慎一郎もひと目で気に入っていた。
繁華街の海側の外れに小さな倉庫が売りに出されていた。魚の卸をしていた人物が、廃業して売りに出していたものだった。小さいと言ってもそれは倉庫としての寸法の話で、むしろビリヤード場にはもってこいの広さだった。ビリヤードの台が五台ほどは余裕で設置できた。中には管理用の事務所や小部屋、台所も付いていた。専用の店舗付き住宅ではなかったが、少し手を加えれば、居住用に改造が可能であった。慎作は商談を中座して、駅前の郵便局へ行った。現金を引き出すとそれを手に不動産屋へ戻った。そして、現金払いを武器に、その物件を安く買いたいて手に入れた。それから、その足で大津港町の役場に出向き、正式な住民登録を済ませた。

数日後、慎一郎は小学五年生の途中から地元の小学校に通い始めた。慎一郎は嬉しかった。彼は、生まれて初めて安住の地を与えられたのだ。

四．例外的少年(2)

九州・福岡市―。

浅尾義和は鬱蒼とした茂みの中に隠れて、その隙間からじっとそれを観察していた。

十一歳の穢れを知らないその瞳は異様に輝いていた。むしろ、何かに取り憑かれているような表情と言った方が近かった。十五メートルほど離れた芝生の上で、父親の浅尾謙三が散弾銃を構えるところだった。その隣では、使用人が発射マシンにクレーをセットし、謙三の合図を待っていた。

「はっ！」

しばらくして、謙三のかけ声を合図にクレーが発射された。

白い小さな円盤が青空に向かって勢いよく放たれ、そして、謙三の撃った散弾によって瞬く間に砕け散った。

「わぁー！」

その様子を見ていた義和は思わず感嘆の声を上げ、体をぞくぞくと震わせた。

すぐに我に戻った義和は、あわてて口を押さえ、再び息をひそめた。幸い父親達には気づかれていないようだった。

再びクレーが放たれ、散弾によって空中で粉砕された。今度は、声を漏らさずに見ることができた。そうやって謙三の射撃が終わるまで、義和は父親の一挙手一投足をじっと凝視していた。発射したすべてのクレーを割ることはできない。数回に一回は、外すこともあった。だが、クレーを捕らえ綺麗に粉砕する様を見た時には、鳥肌が立つほどに興奮していた。

一時間半ほどでクレー射撃は終了した。義和はそれを見届けると、謙三達に見つからないように物陰に身を隠しながら、屋敷の中へ急いで戻った。洋風の巨大な屋敷であった。中に入ると、一目散に食堂ルームへ向かう。

食堂では、ちょうど使用人の春乃がおやつの用意をしていた。

「おや、義和坊ちゃま。探していたのですよ。おやつの用意ができましたよ」

食堂の大きなテーブルには牛乳とカステイラが置かれていた。熊久のカステイラは、義和の一番の好物だった。熊久は、江戸時代から二百年以上に渡って浅尾家に出入りする老舗の和菓子屋だった。

ちょうど義和がカステイラを平らげたところに、再び春乃が戻ってきた。

「義和坊ちゃま、旦那様がお呼びですよ」

「お父さんが？」

「はい。書斎で待っていらっしゃいますよ」

「ねえ、春乃さん…。お父さんは、何か怒っていなかった？」

「いいえ、特には…。どうかされましたか？」

「うん、それならいいんだ。すぐに行く」

義和は、内心ドキドキしながら謙三の書斎へ向かった。
クレー射撃をこっそり覗いていたことがばれて、叱られるのかもしれなかった。二階の謙三の部屋の前に立つと、勇気を出して扉をノックする。
「お父さん、義和です」
「入りなさい」と、謙三の返事が聞こえた。
広々とした洋風の書斎に入ると、義和の目はすぐに机の上の銃に注がれた。大きなマホガニーの机の上には、さっき庭で使用した二梃の散弾銃が置かれていた。両方とも本来の真っすぐな銃の形ではなく、ちょうど平仮名の「く」の字のように中心あたりで折り曲げられていた。そうするのが鉄則だった。たとえ中に弾が装てんされていなくても射撃以外の時は銃身をそうやって折り、機関部を開放しておかなければならないのだ。それが、散弾式銃を扱う者の絶対に守らなければならない心得だった。
「今日は、おまえにひとつだけ注意をしておこうと思ってな」
謙三は、手にしていた布を銃の脇に置いた。ちょうど、銃の手入れ始めようとしていたようだった。
「はい。何でしょうか？」
「お父さんのクレー射撃のことだ」
やはり、呼ばれたのはそのことだった。
怒ってはいないようだった。だが、謙三の顔は真剣そのものだった。
「義和、おまえは銃が好きか？」
「はい。大好きです」
「そうか。そうだろうな…」
そう言うと謙三は、何かを考えるようにいったん黙った。
それから、再び話しを始めた。
「見てはいけないとは言わない。ただし、私がクレーの練習をしている時は、ちゃんと私の見えるところに居なさい。勿論、私の後ろ側にだ。とても危険だからな」
「はい。わかりました」
「私は、クレーの練習をする時は、いつもおまえが安全な場所に居るのかをきちんと確認してからしているのだよ。勿論、さっきおまえが茂みの中に隠れているのもちゃんとわかっていた」
「ごめんなさい」
やはり、気づかれていた。
だが、謙三は優しい物腰で話しを続けた。
「それは、狩猟に行く時もそうなのだ。常に同行者がどの位置に居るのかをきちんと把握していなければならないのだ。誤って、撃ってしまわないようにな。それができない者は、銃を持つ資格がないのだ。わかるね？」
「はい、お父さん。これからは、そうします」
「うん。それと、もうひとつ…。見るのは許すが、銃に触るのだけは絶対にだめだ。これも胆に銘じておけ。約束できるな？」
「はい。絶対に触りません！」
謙三は、床に置いてあったジュラルミンのカバンの中の箱から弾を一発取り出して、義

和に見せた。
「これが、散弾の実包…。つまり、弾(たま)だ」
それは直径が二センチ弱で、長さが五センチくらいの円筒形をしていた。プラスティックでできており、片方の底の部分は金属で蓋がしてあった。
「この中に、四百個ほどの小さな仁丹のような鉛の粒が詰まっている。そして、それを百メートル以上も遠くに飛ばすだけの火薬が詰まっているのだ」
義和は、眼を皿のようにしてそれを見つめていた。
「義和。おまえは今、いくつだ？」
「十一歳です」
「うん、そうだな。仮に、今の十一歳のおまえが銃でこの弾を撃ったら、どうなると思う？」
「わかりません」
「おまえは、撃った反動で後ろにすっ飛ばされる」
「本当に？」
「ああ。ひょっとしたら、大怪我をするだろう」
「そんなに…！」
「お前自身が怪我するのは自業自得だとしても、その時に、もし周りに人がいたらどうなる？」
「弾が当たっちゃうかもしれません…」
「そうだ。そんなに威力があって、危険なものなのだ。だから、子供は絶対に触ってはならないのだ」
「じゃあ、お父さん。いつになったら触ってもいいの？」
「それは、おまえの体がきちんとできあがって、銃の反動に負けなくなってからだよ」
「そうか…」
謙三の丁寧な説明に、義和は一応納得したようだった。
だが、結局それでは収まらなかった。
「それは、何歳ぐらい？」
「そうだな、高校を卒業したくらいだろうか」
「それは何歳？」
「だいたい、十八歳ぐらいかな」
「十八歳…」
義和は頭の中で引き算をすると、不満気に言った。
「お父さん。あと七年もあります」
「何だ、待ちきれないのか？」
「はい。とても待ちきれません」
普段は聞きわけのいいはずの息子が、この日は珍しく食い下がって来ていた。
「ははは…、よほど銃が撃ちたいのだな。困ったものだ」
謙三は、苦笑いをした。
「だが、それまでは我慢するしかないぞ。第一、本来なら銃が持てるようになるのは二十歳からなのだぞ。法律でそう決められているのだ。まあ、ここの敷地内ならいいだろうと思って、大負けに負けて十八歳と言ったのだよ」

「でも、七年も…」
義和の落胆ぶりは、目を覆うばかりであった。
さすがに困った謙三は、あたりを見回すと銃の道具箱の中に、ある物を見つけた。
「その代わりに、今日はおまえにこれをやろう」
そう言って謙三は、手の平に乗る程の小さなプラスティックのケースを義和に手渡した。開けてみると、それは耳栓だった。
「これからは、近くで射撃を見る時は必ずこの耳栓をしなさい。そうしないと、耳の鼓膜をやられてしまうからな。勿論、撃つ方の私も必ずこれを付けている」
「はい。ありがとうございます」
言いながら、義和は耳栓を嬉しそうにつけてみた。
ほんの少しだけ、射撃をする人間の気持ちになれた。
「これから、私は銃の手入れをするところだ。おまえはそこで見ていなさい」
「はい。お父さん」
義和は、再び嬉しそうに答えた。
まず始めに、謙三は、テーブルの上の二梃の銃について、簡単な説明をした。一梃はアメリカ製のレミントンという銃で、もう一梃はイタリア製のベレッタという銃だった。謙三は、それぞれの銃の特徴と違いをわかりやすく義和に説明した。義和は、時には質問を交えながら熱心に聞き入った。
説明が終わると、謙三は銃を分解して手入れを始めた。
銃身の中は、先端に布を巻きつけた細長い棒を使って丹念に掃除してやる。煙突掃除の要領だった。金属部分にはオイルを塗って、念入りに拭いてやる。その作業には決して手を抜かない。それは一族に代々受け継がれる血統のなせる業なのだろう。古くは、それは刀や弓矢だった。祖父の時代は火縄銃だった。
浅尾家の系図は、戦国の世にまでさかのぼることができる。江戸時代までは、九州北部のこの地の正式な領主であった。昭和の時代の今も形を変えてでこそ、それは変わっていなかった。一族の経営する企業は、鉱業や建設などの幅広い分野でこの地方の基幹になっている。今も、この地方は浅尾家の城下町と言ってよかった。
そういう意味では、浅尾謙三は名君と言えた。優れた実業家だった。太平洋戦争のダメージから二十年で一族の事業を見事に復活させ、軌道に乗せていた。そして、いずれはその王国を義和に引き継がせることになる。一粒種の義和は大切な後継ぎだ。幸い、優しく真っすぐに育っている。だが、優しいだけでは王国を束ねてはいけない。強さや厳しさの側面も備えて行かなければならない。彼はその帝王学の第一歩を、この銃の扱いの作法を通して息子に学ばせようとしていた。

五．父の助言

近衛慎一郎は、父のその様子をじっと凝視していた。
鋭い眼光だった。その瞳だけを見れば、それは十歳そこそこの子供のものではなかった。すでに多くの人間の悲哀を見てきた瞳であった。

父の慎作は、入荷したビリヤード台の設置をし終わると、その上で球を転がし始めた。球の転がり具合を調べているようだった。それに長い時間をかけていた。台の納入業者は、組み立ての際に水平器を使って調整していったのだが、慎作は別の視点でチェックしているようだった。ビリヤード台の表面に張られている美しい緑色のフェルト材の感触も入念に調べる。

ようやく台の確認が終わると、慎作は今度は同じく新しく入荷したキューをチェックしはじめた。客に貸し出す為のキューだ。これも一本一本を入念に確認する。キューの良し悪しを見るうえで一番のポイントは、先端から握りまでが歪みなく真っすぐになっているかどうかだ。粗悪品や年月の経ったものは、必ず反り返っているからだ。それを調べる一番簡単な方法は、キューをビリヤード台の上に寝かせて置いて、そのまま転がしてみることだ。真っすぐなキューであれば、そのまま綺麗に転がる。だが、少しでも反っていると、ゴトゴトと上下に揺れながら転がるのだ。

キューのチェックが終わると、慎作はそのうちの一本を手にして、台上の球を突き始めた。台やキューの最終確認の為だった。父が練習で球を突く姿を、慎一郎は久しぶりに見た。

すぐには突くことはしない。まず台上の四つの玉の位置関係を見計りながら、それをどう攻略するかを思考する。それが決まってから突く体勢に入る。研ぎ澄まされた神経の全てが的の玉に集中される。あたりは水を打ったように静まり返り、呼吸をすることすら許されない。その張り詰めた空気の中で、キューは突き出され、玉を打つ。それはまさに、獲物を相手にする時の闘う男の姿だった。慎一郎は、父が今までやってきた賭けの仕事としてのビリヤードは、嫌で仕方がなかった。子供心ながら、絶対に同じ道は歩むまいと誓っていた。だが、練習で純粋に台に向かう時の父の姿は、別だった。とても輝いて見えた。

カチン、カチーンと、球同士がぶつかる音が店中に響き渡った。キレのあるその音は、球がまだ新品であることを如実に物語っていた。心地よい音だった。古くなった球では、どんなに磨いてもこういう抜けるように響く衝突音は出ない。

三十分ほど、静まり返った店内に玉のぶつかり合う音だけが響いていた。

「おまえも、突いてみるか？」

一段落した慎作が、声をかけた。

「うん」

「じゃあ。まずは、自分ひとりで突いて見てみなさい」

そう言って、慎作は息子にキューを一本手渡した。

慎一郎は戸惑うことなく、さっき父がしていたように、台上の玉の状態を観察し始めた。台上には、四つの球が乗っている。白色が二つと赤色が二つである。自分の球(手球)以外の残った三つの球をいかに効率よく当てていくかを考える。攻め方が決まると、動作に入る。攻めの選択の正しさはともかく、慎一郎は確実に球を当て続けた。

「ほう、なかなかやるな…」

慎作は少し驚いた。

技法的な細かいことは仕方がないにしても、慎一郎には、ビリヤードの基本中の基本である球を動かす角度を判断する能力があるようだった。大概は、それは反復練習で体得していくものであるが、ごく稀に生まれながらにその感覚を備え持った人間がいる。慎一郎

は、その部類だと思った。
　ようやく、球を外し一息ついたところで、慎一郎がアドバイスを求めた。
「お父さん、どうだった？」
「うん。当てる角度と強さ加減はいい感じだ。ただ、まだ真っすぐな回転だけで突いているから、これからは少しずつ球に回転を与える練習をしていくといい」
「どんな回転？」
　慎一郎の質問に、慎作はキューを手にして実際に彼の目の前で突きながら、説明しはじめた。
「例えば、こうやって球の中心より右を突けば、相手の球に当たった時に、その球も、自分の球もその回転の影響を受けた動きになるんだ」
　慎一郎は、球のどの部分を突けば、どういう動きの結果が得られるかのバリエーションをひとつひとつ実演して見せた。
　父は、台上の球を意のままに自在に操っていた。慎一郎は、そのひとつひとつに見入った。まるで魔法を見ているようだった。
「時には、球を飛ばす場合もある」
「えっ、飛ばすの？」
「そうだ。見ていろ」
　通常、球を突くときのキューは台とほとんど水平に持つものなのだが、それだけは違っていた。慎一郎は、キューを垂直に近い角度で持った。そして、真上から力強く突き下ろした。突かれた球は、見事に大きくジャンプした。
「わー！」慎一郎は、思わず感嘆の声を上げていた。
　この時だけは、彼は童心の表情を見せた。
「これは、マッセという技術だ。時にはこれが必要になる場面もあるんだ」
「凄いや！」
　慎一郎は、父の実力が並ではないことを実感させられた。
「お父さん。どうしたら、そんなに上手に突けるようになるの？」
　実演を終えた慎作に、彼が訊ねた。
「そうだな…。お父さんも若いころ、おまえと同じ質問をしたことがある。相手は、神業を持つビリヤードの名人だった。…お父さんの師匠だった人だ」
「で、その師匠さんは、なんて答えたの？」
「ははは…。勿論、何も答えてくれなかったさ。ビリヤードにも、王道なんてものはないからね」
「やっぱり…」
　想像していた通りの返答に、慎一郎は少し落胆した。
「ただ、ひとつだけ教えてくれたことがある」
「それは、何？」
　慎一郎の目が輝いた。
「たったひと言、球と話をしなさい、って言われた」
「話をするの？」
「ああ。まるで禅問答のようだろう」

「…それで、お父さんは球と話ができたの？」
「いや。残念ながら、お父さんにはそれができなかった…。だから、今みたいになってしまったのかな…」
慎作が、困ったような笑い顔で答えた。
「そうか。話をするのか…」
慎一郎が、呟やくように言った。

六．友部の少年

茨城県西茨城郡友部町―。
田代幸吉は、ひと気のないその工房で、ひとり散弾銃の製造作業に励んでいた。
銃床部分の削りの作業は、特に集中力が必要な工程だ。金属部分と違って、やり直しがきかない部位だからだ。
汗がひと滴、こめかみの辺りから顎に伝わった。田代は、いったん作業の手を止めて額と首の周りの汗をタオルで拭ってから、再び目の前の木材と向き合う。
作業には常に慎重さが要求される。その昔、イタリアで修業した幸吉は、使用する木材の重要さを誰よりも知っていた。そして、その妥協を許さないこだわりこそが、彼をして日本を代表する銃職工と言わしめるまでにしたのだ。
例えば、高級な銃には高価なフランス産のクルミが多く使われる。ブナやカエデといった他の材料よりも温度や湿度による歪みなどの変形が少ないからだ。銃造りというのは、そういった「僅か」なこだわりの積み重ねである。そして、その「僅か」な差が、銃の世界では最後には「決定的」な差になって現れてくるのである。つまり、最終的には銃の命中精度に関わってくるということなのだ。
三上恵造は、工房の入り口でその様子をじっと凝視していた。
幸吉がもう一度汗を拭こうとした時、恵造少年の存在に気付いた。
「おや…、坊ちゃん。そんなところで、どうしました？」
「へへへ…」
「そういえば、今日は、学校はお休みでしたね」
「うん。田代さんは、何で休みの日もお仕事をしているの？」
「ははは…。そういえば、そうですね。私の場合は、これは仕事というよりは、趣味みたいなものですから…」
「趣味って、遊びと同じ意味？」
「ははは…。まあ、そんなところです」
「じゃあ、田代さんは銃を造るのが大好きなんだね？」
「はい。大好きです」
「僕も、大好きだ」
二人は心の通った笑顔を交わした。
「だったら、そんなところにいないで、こっちへ来て見たらどうですか？」
「でも、お父さんが、工場の中だけは絶対に入っちゃだめだっていうから。前に一度入っ

たのがばれた時、死ぬほどおしりをたたかれたんだ。痛くて眠れないほどいっぱいたたかれたんだ。だから…」
「そんなことがあったんですか。でも、そばで見たいでしょ？」
「うん。凄く見たい。だから、いつもこの辺からそっと見ていたんだ」
「そうだったんですか…」
その理由は、幸吉にも想像がついた。
恵造少年は学校でも有名ないわゆる乱暴者と言われる類の子供だった。ここの会社のオーナー社長である恵造少年の父親は、それを案じて、工場には近づけないようにきつく戒めてきたのだ。しかし、幸吉は、少年の本質を理解していた。
「じゃあ、坊ちゃん、こうしましょう。私が社長に入ってもいいようにお話ししてあげますよ。但し、私と一緒にいる時だけですよ」
「で、でも…」
「ははは…、大丈夫ですよ。社長は、私の意見だけはちゃんときいてくれますから」
「本当に？」
「ええ、絶対に大丈夫ですよ。さあ、こっちへいらっしゃい」
「うん！」
満面の笑みをたたえて、恵造少年は田代のもとへ走り寄った。

七．北茨城の少年

その夜の大津港の町は、祭りで賑わっていた。
佐波祇(さわぎ)神社から港にかけて、人の波が絶えなかった。沿道には所狭しと出店(でみせ)が立ち並ぶ。
工藤健吉が、子分衆を従えてその波の中にいた。この日二度目の見回りだった。だが、決してその人波をかき分けるような横暴な歩き方はしない。できるだけ目立たぬように立ち振る舞う。それが、彼の流儀であった。
佐波祇神社関連の行事の「仕切り」は、工藤一家の重要な役回りであった。この神社で開催される「常陸大津の御海祭」は、無形民俗文化財の指定を受けている程の重要な行事である。従って、一家はこの神社関連の行事が無事に運営され、終了される為に総出で事にあたるのだ。
特に、見物客同士の喧嘩には注意を払う。祭りに酒はつきものだ。酔えば、それだけトラブルは起きやすくなる。国の指定を受け、歴史のある祭りの中での野蛮な「揉め事」は極力穏便に排除しなければならない。本来、それは地元の警察や役場の仕事になるのだが、双方とも工藤健吉には絶大なる信頼を置いており、重要な部分を彼の組にまかせていた。理由のひとつは、健吉の厚い人望にあった。もうひとつは、工藤一家の強い規律の存在であった。
組員の大半は、やむない事情で船を降り健吉に拾われた元漁師である。鍛え上げられた組員達ではあるが、どんなことがあっても自分からは相手に手出しをしない。例え相手に殴られてもだ。それが一家の絶対的な規律であった。

祭りの仕切りでやることは多い。出店(でみせ)の選定、許可にも神経を使う。他の組の息のかかった店は入り込まないように注意を払う。一般客とのトラブルは絶対に起こさないように配慮するのだ。
「ああ、どうも。ご苦労様です」
健吉は、出店の主人のひとりひとりに愛想よく声をかけ、頭を下げる。
それを知らぬ誰かが見れば、どこかの愛想のいい普通の商店主ぐらいにしか見えない。外見やその立ち振る舞いからは、とても屈強の一家を束ねる大親分には見えなかった。
列の最後部は若頭補佐の兼光だった。健吉が最も信頼を寄せる男だ。その兼光と並んで歩く男は、何故か子供に人気のマンガの主人公「鉄人２８号」のお面をかぶっていた。出店で買ったものだ。
「兼光。親父は何でさっきから的屋の連中にあんなにペコペコ頭を下げて、愛想を振りまいているんだ？」
お面の男が兼光に不服を言った。
その声は柄に似合わず甲高い。
「まあ、あれが親分のお役目ですから」
「やっぱり一緒に来るんじゃなかったよ。親父のあんな姿を学校の奴らに見られたりしたら、格好悪くて仕方がないや」
「ははは…。それで坊ちゃんは、お面をかぶったままにしているんですね」
兼光は、つい笑ってしまった。
体格こそ大人と変わらない大きさだが、発想はやはり小学生であった。
「ま、まあ、そういうことだ」
「ははは…。でも、坊ちゃん。それは少し違いますぜ。能ある鷹は爪を隠す、ってやつですよ」
「な、何だ。その、鷹が何とかっていうのは…？ まだ、学校じゃ教えてもらっていないぞ」
「親分のように凄く強い人ほど、普段はああして他人に優しくするもんなんですよ」
「本当か？」
「ええ。親分ほど強い人はこの県北にはいませんよ…」
兼光は、少し考えてから話を続けた。
「坊ちゃんは、うちの親分が他の親分衆から「藤健(どうけん)」と呼ばれているのをご存知ですよね？」
「うん、知っている。古い仲間のおじさん達がうちに来ると、親父は皆からそう呼ばれているよ」
「その理由をご存知ですかい？」
「そのくらいのことなら勿論知っているさ。工藤健吉を呼び易く、短くしているんでしょ？」
「ええ、そうです。でも、それは表向きの意味で、もうひとつ裏の意味があるんです」
「裏の意味？」
「はい。親分が若い頃から言われていたそっちの方が、実は本当の意味なんです。どうけんとは、どう喧(けん)＝どう猛で喧嘩が強い、という意味から来ているんです」
「それって、凄く喧嘩が強いってこと？」

「ええ、それはもう。親分が本気になった時は、このあっしでも、びびりますよ」
「ええっ、兼光でも？」
「はい。震えあがって、何もできなくなります」
「そうなんだ。親父はそんなに…」
「坊ちゃん。この話は、あっしから聞いたことは内緒にして下さいよ。親分の怖い部分の話は、坊ちゃんには隠すようにきつく言われているんですから」
「うん、わかった。絶対に言わないよ。…それに、もう顔を隠すのはやめる」
そう言うと、少年は迷わずお面を顔から外した。
小学生の面影は残るが、その太く真っすぐな眉とギョロっとした大きな目からは、すでに豪放な素養が見て取れた。
「そうです、坊ちゃん。それでこそ、工藤健吉の息子ですぜ！」
少年が面を外すのを見た兼光は、この話をして良かったと思った。
父親譲りの猪突猛進的な性格だが、同じように人の気持ちが理解できる子供でもあると感じた。
「強いのを隠すのが、本当に強い奴なのか…。難しそうだなぁ。でも、何か格好いいなぁ…」
兼光の話に感動した少年は、その場に立ち止り初夏の夜空を見上げた。

八．借金の形

近衛慎一郎は小学校の授業が終わり、家に向かっていた。
途中、いつものように港に寄り道をする。吉展ちゃん誘拐事件以来、学校側は子供が一人で行動することを避けるように通達していたが、そんなことはおかまいなかった。
慎一郎は、学校では友達を作らなかった。体が大きくまったく笑顔を見せない彼は、教室では近寄りがたい存在だった。転校して間もない頃に、学校のいわゆる番長的存在の上級生に目を付けられた。そして、脅しをかけられた時に、事も無げにその上級生を投げ飛ばした。そのことも、皆が近づかない理由の一つだった。十一歳になるまで、父親に連れられて日本中の夜の大人の世界を渡り歩いた彼にとって、年の近い子供などはまるで敵ではなかった。そして、関心も湧かなかった。その代わりに、大人とは誰かれなく接した。相手に物おじしない性格も手伝って、町中の商店や港の漁業関係者にはよく声を掛け、掛けられ、顔見知りも多くなった。
大津港では、漁師や市場の人間が明日の仕事の準備に精を出していた。この界隈も景気が良かった。日本有数の漁港であると同時に、大きな炭鉱などの産業を持つ町は栄えていた。加えてこの町は、五浦海岸を中心とした観光の名所としても賑わっていた。
それを考慮して、父の慎作はビリヤード台の設置は二台にとどめ、店舗の半分は麻雀ができるようにした。はたして、その予想は正しかった。店はすぐに繁盛した。漁業関係や鉱業関係の地元民に加えて、観光客も取り込むことができたからだ。ビリヤードと雀荘の両方を併設した事によって、常連客とそれに加えて流れの観光客を呼び込むことができたのだ。日本中の歓楽街を見てきたことが役立っていた。そして、もともと彼には商才があ

った。
慎作は、小名浜での鏑木吾郎との一件も教訓にしていた。今回は、店のオープン時から地元の顔役の所へ挨拶に出向いて許可をもらった。交渉は、想像以上にスムーズに行えた。月々の「管理料」は、吹っ掛けられることなく常識の範囲内で済ませることができた。この界隈を仕切る工藤一家の工藤健吉は昔堅気の任侠者で、義理人情に厚いことから地元民からも慕われていた。健吉は日本中の裏世界で生きてきた慎作を気に入り、無茶な条件を付けずに迎え入れてくれたのだ。
「こんにちはー」
慎一郎は、市場で働く顔見知りの大人達に会釈をしながら魚港を一周し、家路についた。
店の事務所を抜けて、居住部に入った慎一郎は、部屋の隅にある見慣れないふたつの皮のケースに気づいた。
片方は長さが一メートル近くあって、中心には持ち運べるように握りも付いている。ビリヤードのキューのケースによく似ているが、それよりもふた回りほど大きく、頑丈そうだった。もうひとつは同じような造りだが、小さな旅行カバンほどの大きさだった。
「おかえり」
ちょうどそこへ、慎作が入ってきた。
「ただいま。…お父さん、これ何？」
「ああ、それか。お客さんからもらったものだ。現金を持っていないので、借金の形にもらったんだ」
慎一郎が触ろうとすると、
「駄目だ、慎一郎。それは子供が触るものじゃない！」
慌てて、慎作が止めた。
「どうして、子供が触っちゃいけないの？」
慎一郎が理由を訊こうとした時、チリリンと店の鈴が鳴った。
店の入口のドアにつけてある鈴の音だった。客が入ってきた合図だった。
「いらっしゃいませー」
大きな声で応えながら、慎作が慌てて店に出て行った。
一人になった慎一郎は、そのケースから目を離すことができなかった。その衝動を抑えることができなかった。どうしても中身を見てみたかった。そっとドア越しに店の中の様子を窺ってみる。慎作は、今入って来た客のビリヤードの相手を始めようとしていた。しばらくは部屋に戻ってこないはずだ。
慎一郎は、まず旅行カバンに似た方のケースを開けてみた。中には同じ紙製の箱が十二個、重ねて入れられていた。箱のひとつをとって中を開けてみる。直径が二センチ弱で、長さが五センチくらいの円筒形をしたプラスチィック製の何かが、ぎっしりと並んで詰め込まれていた。そのうちのひとつを手に取ってみる。見た目よりは重かった。振ってみると、筒の中には何か細かくて重いものが沢山入っているようだった。プラスチィックの筒の底の部分は金属でできていた。観察し終わると、触ったのがわからないように元通りに箱に戻し、皮のケースを閉じた。
今度は、細長いケースの方の留め金を音が出ないように外し、ゆっくりと開けた。
慎一郎は、ゴクリと生つばを飲んだ。

中には、二つに分解された散弾銃が収められていた。そして、それを手にした時、慎一郎は全身に鳥肌が立つのを感じた。

「M…J…」

慎一郎は、引き金の上の金属の部分に刻まれたイニシャルを無意識に読んでいた。

九．挑戦

国鉄常磐線の大津港駅から上野方面へ百キロほど上ったところに友部駅がある。

そこから西へ五キロほど入った山間に三上銃器製造会社、通称ＭＪ社があった。東日本に一社だけある散弾式銃の製造会社である。

社長の三上則夫と技術面の責任者である田代幸吉は、大きな木製の台の上に並べられた二十余りの金属の部品を見つめていた。やっと入手したイタリア製の散弾銃を細かく分解したものだった。

二人は、昨年開催された東京オリンピックのクレー射撃競技を視察に行って、衝撃を受けて帰ってきた。

二人はその会場で、イタリア製の銃の圧倒的な強さを見せつけられたのだ。当時、二人が自信を持って送り出した自社製品の銃は、イタリア勢に完膚なきまでに打ち負かされた。その違いを徹底的に分析する必要があった。一体、どこにそこまでの差があるのか。銃自体の性能にどの程度の差があるのか。あるとすれば、改善の余地があるのか。それとも、銃そのものとは別の理由なのか。それを扱う選手の力量なのか。あるいは使われている散弾の差なのか。早急に、理由を調べる必要があった。

ＭＪ社は、その扱う製品の特殊性から、戦時中に業績を伸ばした数少ない会社だった。巨大工場ではないので幸い米軍の空爆のターゲットにはされず、戦火を逃れることができた。売上的には、戦争が終わっていったんその反動を受けたが、すぐに始まった朝鮮戦争のおかげで再び盛り返すことができた。

ただ、その両方とも一過性のものであることはわかりきっていた。しかも、今の高度経済成長の様子から考えて、銃を使った狩猟で生計を立てる人はどんどん消えて行くのは目に見えている。かといって、いくら景気がいいとは言っても、知名度のないクレー射撃の人気がいきなり高まるとも思えない。つまり、狩猟用や競技用の一般客を相手にした散弾銃の売り上げは、今後伸びる見込みがないのだ。父親から家業を継いだ則夫にとって、これから社業を安定させていく為には限りある国内の需要が相手では難しかった。つまり、世界に通用する銃を造って、輸出に活路を見出していくしかなかったのだ。

「田代さん、どう思いますか？」

則夫が恐る恐る訊ねた。

則夫は田代の意見に頼らざるを得なかった。彼は、ＭＪ社の技術面での柱だった。おそらく日本で一番の銃造りの職人であり、則夫が全幅の信頼を置いている人物である。

「社長。この一週間あれこれやってみましたが、原材料さえ手に入れば、私はこれとまったく同じものを造ることができます」

田代は気負うわけでもなく淡々と、しかし力強く答えた。

「では、我々の技術とは差がなかったのですね？」
「ええ、ほとんど…。ですが、我々という表現は少々違います。私なら造ることができると申し上げたのです。他の工員の力量では、現時点では無理だと思います。つまり、今のＭＪの会社全体としての実力ではまだまだという意味です」
「そういう意味ですか…」
やはりそうなのかと、則夫は落胆した。
日本の銃造りの里である滋賀県国友に生まれ育ち、戦前からイタリアに銃造りの勉強に行っていた田代の銃職人としての力量は、あまりにも突出しているのだ。
「でも、社長。そう気を落とさなくてもいいのですよ。銃そのものの基本的な考え方という点においては、当社の製品はほとんどイタリアのものに遜色がないことがわかったのですから。あとは、細かい部分の差を縮めて行くのです」
「本当に？」
「ええ、追いつけるところまできていますよ」
「そ、そうですか？」
則夫は、依然として半信半疑だった。
彼は、絶対の自信を持って送り出した銃の東京オリンピックでの惨敗の後遺症から、なかなか抜け出せないでいた。
「ええ、大丈夫です。ですから、これから工員全員のレベルアップを図ればいいのです。しかも、ただ単に腕を上げるだけではいけません。より早く、より効率的にそれができるようにならなければなりません」
「より早く、ですか？」
「はい。同じ価格で世界の市場に送り出しても、すでに名声を確立しているイタリア勢やアメリカ勢にはかないません」
「確かにそうでしょうね…。そうなると、こちらは値段を安くして勝負するしかありませんね」
「そうです。であれば、同じ性能の物を早くたくさん作らなければならないでしょう」
「生産性を上げれば、コストは下がるか…」
「そういうことです。我々日本人の取り柄は、手先が器用なことと勤勉なことです。必ず、イタリアやアメリカの連中を追い越すことができると思います」
「田代さん。社員を育成できますか？」
「やってみます」
「そ、そうですか。是非、お願いします」
「工員達の中には、なかなか筋のいい人がいますからね。坊ちゃんも含めて」
「坊ちゃん？ せがれの恵造のことですか？」
「はい、そうです」
「まさか。恵造は、まだ小学生ですよ。しかも…」
「しかも、かなり、ヤンチャでいらっしゃる」
「ははは…。そのとおりです」
二人は、その名前が出たところで緊張が解けたのか、笑い合った。
則夫の息子の恵造は、この界隈では有名なガキ大将だった。

「田代さん。また何で恵造が？」
「社長は気づいていらっしゃらないようですが、坊ちゃんはああ見えて、実はかなりの素質があるのですよ」
「本当ですか、あの乱暴者が？」
「はい。銃造りに興味があるようで、しょっちゅう私の所に来てはあれこれ聞いてきます。私に教わっている時の彼は、別人のように良い子ですよ」
「信じられないなあ…。ま、まさか、こっそり銃を持ち出したりしているのでは？」
「その点については、私が強く戒めています。絶対にそういうことはさせていませんからご安心ください。単純に機械工作に興味があるだけのようです」
「そうですか。それならばいいのですが…」
「ところで、社長。私に考えがあるのですが」
「是非、聞かせてください」
「木工芸の腕のいい職人を探して、ＭＪに引っ張って来てください。イタリアと勝負するにはその人間が欠かせません。その分野だけは私の専門外ですので…」
「木工というと、銃床の部分のことですね？」
「ええ。海外で勝負していくには、機能や性能といった本来の要素の他に、見た目の美しさという要素も重要になると思います」
「美しさか…。考えてもみませんでしたが、確かに、イタリアの銃のカタログを見ると、そういう側面を大切にしているように感じますね」
「はい。彼らは、銃造りは芸術品を造るのと同じだと考えていますから」
「なるほど、もっともですね。よくわかりました。でも、どこに行けばそんな人が…？」
「私にもわかりませんが。例えば、飛騨の高山など木工芸を伝統にしている地域なんかを片っ端から探しましょう。あるいは、楽器製作の人なんかもいいかもしれません」
「ああ…。そういえば、バイオリンなんかの製作も銃床と似たような技術かもしれませんね。そうすると、それはヤマホのような会社がある浜松の方なんでしょうかね？」
再び二人は、安くて性能のいい新しい銃造りの話題に没頭していった。

十．盗難

ビリヤード場を軌道に乗せた近衛慎作は、駅前に手ごろな物件を見つけ、小さな観光業を始めた。
彼は、前々からこの事業を考えていた。流れの賭けビリヤード師として日本中を行脚しているうちに、事業をやるなら観光業をやってみたいと思うようになっていたのだ。この話を地元の顔役である工藤健吉に相談すると大賛成してくれた。さっそく、小型のバスを一台購入し、その免許を持つ運転手を雇った。資金は健吉が援助してくれた。市内や北茨城周辺の観光巡りをするのがプランの中心だった。許認可関係も、健吉の役所への顔もあって比較的容易に取得することができた。
この事業も好調にスタートした。小型バスは小回りが利くことから、タクシーを使った個人観光のように、客の要望に自由に応じることができた。それが好評だった。この界隈

には五浦の六角堂などの景勝地が多く、加えて大津港からの新鮮な魚介類が楽しめるということで、客集めにはさほど苦労しないで済んだ。

また、通常の観光地だと湿りがちな冬場においても、大津港にはあんこう鍋という強力な「売り」があったことから、通年で安定した集客を実現することができた。投資した健吉も、次々に期待に応えてみせる慎作を以前にも増して可愛がるようになった。慎作は次第に忙しくなったこの観光業の方に時間をとられるようになり、ビリヤードの店を空けることが多くなっていった。

そんなある日、ビリヤードの方の店が空き巣に入られた。幸い、レジスターの中にはたいした金銭は入っていなかった。住居の方も荒らされたが、借金の形に取った散弾銃が持って行かれたくらいで済んでいた。高級そうな皮のケースに入っているので思わず持って行ったのだろう。現金の被害もなかった。盗られたものもたいしたことがなく、説明もやっかいであったことから慎作は警察には届け出なかった。

数日後、思案した慎作は横浜から姉の菊枝を呼び寄せることにした。ビリヤード場の店番を任せる為だった。身内の彼女なら、家事などの身の周りのことや、息子の慎一郎の世話も任せられるので好都合だった。一人身の菊枝は喜んで引き受けてくれた。何よりも、十数年間ずっと風来人だった弟が、きちんと腰を落ち着けて生活を始めてくれたことが嬉しかった。彼女はすぐに大津港に引っ越してきてくれた。

子供のいない彼女は、甥にあたる慎一郎を我が子のように扱ってくれた。母親の愛情を知らない彼は、明るく情に厚い菊枝にだけは心を開いていった。

学校の友達とは遊ばない慎一郎は、休みの日は決まって一人で山の中で遊んだ。双眼鏡を持って山の中を散策し、動物や鳥類の生態を観察するのが好きだった。時には狩猟用のパチンコを使って、野ウサギなどの小動物を仕留めることもあった。そういったことには、生まれながらの才能があるようだった。仕留めた獲物は、顔見知りの肉屋に持って行くと小遣い銭を貰うことができた。天気の悪い日は店の手伝いに出てビリヤードや麻雀の客の相手をしたりするが、そうでない普段の時は、そうやって好んで山に入った。よく日本人と欧米人を比較する喩として農耕民族と狩猟民族という表現をすることがある。その場合、通常日本人は前者の方になる。だが、彼は完全に後者の方であった。

「叔母ちゃん、いってきまーす！」

「いっておいで。手ぶらで帰ってきていいんだから、暗くなる前に戻ってくるんだよ！」

「わかった！」

慎一郎が、元気に出発した。

最近は山中の渓流で釣りをすることが多かった。釣り竿と道具箱を背負って、自転車で山へ向かう。その時は、菊枝が水筒と握り飯を持たせてくれた。毎回、魚を釣って帰って来るわけではなかったが、釣ってきた時は菊枝はとても喜んでくれた。

そうのうちに家族がもう一人増えた。もう一人というより、もう一匹だった。慎一郎が子犬をもらってきた。顔見知りの市場の仲買人から分けてもらったのだ。その柴犬には、レオという名前が付けられた。テレビでやっているジャングル大帝というアニメの主人公からとったものだった。

それからは、慎一郎はレオと一緒に居る時間が多くなった。父との約束を守り、面倒はすべて彼がみた。レオが成長してくると、慎一郎は山の中へ連れて行き、訓練を始めた。

いろいろな物の臭いをかがせてそれをどこかに隠す。きちんと探し出して咥えて帰ってきた時は笑顔で迎え、存分に褒めてやった。そうやって繰り返しながら、少しずつ隠す場所を遠くしていった。それは、湖沼や川辺でも行われた。少しずつ水に慣らしていき、泳ぎを上達させていった。

その訓練には彼なりの目的があった。

十一・弟子の眼力

その日、ＭＪ社の射撃場には数人の客が訪れていた。

その中心にいるのは柿見と奥野だった。二人は、来年行われるメキシコオリンピックのクレー射撃競技の日本代表の最有力候補だった。ＭＪ社は、二人の為にそれぞれ三挺の銃を造って用意していた。二人にＭＪの新作銃の試し打ちをしてもらおうと招待したのだ。勿論、気に入ってもらえば、そのまま試合で使ってもらうことを期待しての試射会だった。

則夫達には勝算があった。ＭＪ社が、この三年間をかけて試行錯誤を繰り返して造り上げた渾身の新作銃であった。自信作であった。現時点では、国産では最高レベルの銃に仕上がっているはずだった。

ＭＪ社側は社長の三上則夫はもとより、技術責任者の田代幸吉も同席して、万全の態勢で迎えていた。近くの製造工場の方でも、垣見達からその銃に対する注文が出れば、即時対応できるように工員達も準備万端で控えていた。

いよいよ試射が始まった。垣見達の射撃はさすがに日本の代表の候補に相応しい内容であった。二人は、三挺の銃でそれぞれ一ラウンドずつをこなした。こなしたところで、すぐに休憩に入ろうということになった。クラブハウスに移り、コーヒーと茶菓子がふるまわれる。

則夫と田代は、早く新しい銃の評価を聞きたくてうずうずしていた。だが、垣見達からは世間話ばかりで、なかなか本題の話が出てこなかった。

業を煮やして則夫が切り出した。

「ところで、わが社の新しい銃はいかがでしたか？」

二人は一度顔を見合わせてから、垣見の方が返答してきた。

「ええ、なかなかいい銃でしたよ。できれば、そういったお話しの前に伺っておきたいことがあるのですが…」

「はい、何でしょうか？」

「おたくは、我々の海外遠征などの費用のサポートをする用意はありますか？」

奥野も同感だという様子で頷きながら、則夫の顔を窺った。

「お二人は代表候補ですから、クレー射撃協会から遠征費の補助は出ていますよね？」

逆に、則夫が訊ねた。

彼も末席ながら協会の理事をしているので、そのことは知っていた。候補の指定を受けた選手は協会からそのランクに応じて強化費が支給されているはずだった。

「ええ、いただいております。ですが、あれではまったく足りないのですよ」

垣見が、困ったような顔で答えた。

「外国の選手達と渡り合うためには、もっと海外へ出て試合を多く経験しないと駄目なのです。それに、できるだけ長くメキシコやアメリカに滞在したいのです。その滞在費のこともありますし」

今度は、奥野の方が答えてきた。

それは、示し合わしたような話しぶりであった。

「つまり、わが社の銃を使っていただけるかどうかの基準は、その遠征費などの援助が出せるかどうかということですか？」

則夫は、思い切ってストレートに訊いた。

「ははは…。まあ、そんな風に言われてしまうと返答に詰まってしまいますが…」

垣見達が顔を見合わせて、苦笑いをした。

その時だった。

「あなた達、話の順番が違うんじゃないですか？」

今まで、黙ってそのやり取りを聞いていた田代が声を荒げて言った。

「まずは、銃でしょう？」

あたりが、一瞬で凍りついたようになった。

かまわずに、田代が続けた。

「今日の新しい銃が、お二人にとってどうなのか、合うのか合わないのか。合わないのならどこかに改善の余地があるのか。まったくないのか。まずは、それでしょう。契約の条件なんてのは、そういった話をしてからでしょう？」

垣見達は、二の句が告げられないでいた。

田代の指摘は止まらなかった。

「我々は、世界に通用する国産の散弾銃の開発を目指しています。今日試射していただいた銃は、それなりの自信があるものばかりです。だから、高いお車代を用意してあなた達を招待したのです。ところがどうですか。撃つ前も、撃ってからも、あなた達からはその銃に関しての何の質問も意見も出てこない。ただ、坦々と行事をこなしているだけのようでした。挙句の果てに、今度は契約の条件の話だ。話にならない！」

田代の指摘は的を射ていた。

だから、垣見達からは反論が出ようもなかった。

「社長。申し訳ないが、私はこの人達と一緒に組んで良い銃が作れるとはとても思えない。これで、失礼します！」

そう言い放って、田代は席を立った。

則夫は、田代を引き留めようとはしなかった。自分も同じ気持ちだったからだ。

「あ、あの…」

垣見が、うろたえ気味に則夫に声をかけてきた。

「そういうことになるんですかね？」

「ええ、そういうことです」

則夫が、きっぱりと答えた。

「そうですか。では、我々はこれで…」

そういって、垣見達はそそくさと帰り仕度を始めた。

則夫は、黙ったまま彼らを無視するように外の景色の方に視線を向けていた。口にこそ

出さないが、その態度は明らかに「どうぞ、早くお引き取り下さい」と言っていた。垣見達は逃げるようにその場を後にし、外の車に乗り込んだ。
垣見達が去ると、則夫は田代のことが気になった。探してみると、彼はクラブハウスの反対側にある射撃場のベンチに一人ぽつんと座っていた。
「田代さん、お疲れさまでしたね」
近づいて行った則夫は、何事もなかったように声をかけた。
「ああ、社長…。お客さん達は？」
「ははは…。すぐに、逃げるように帰って行きましたよ」
則夫は、笑って見せた。
「社長、申し訳ありませんでした。大事な、お客さんを…」
田代は、明らかに落ち込んでいるようだった。
「いや、とんでもない。あんな奴ら、ちっとも大事なお客さんなんかじゃありませんよ」
「でも、これで宣伝の方がパーに…」
則夫達のような銃の製造会社にとって、広告宣伝の範囲には限界がある。
宣伝する媒体がほとんどないからだ。従って、最も確実で効率がいいのは有名選手に自分の社の銃を使ってもらうことなのだ。今日の試射会も、最終的にはそれが目的だった。それを十分すぎるほどわかっていながら、田代は垣見達の理不尽な振る舞いがどうしても許せなかった。
「いや、いや。それどころか、田代さんに感謝しています。あんな輩と組んでいたら、おそらくろくなことにはなりませんでしたよ。こっちから願い下げですよ」
「本当ですか？」
「ええ、心からそう思っています。危ないところでした。もし、僕一人だったら、奴らにうまく言いくるめられていたかもしれませんからね。だいたい、本来真っ先に関心を持たなくてはならないはずの銃のことについては棚に上げておいて、平然と別の条件の話をしてくるのですからね。そんな奴らなんかお先が知れていますよ。あんな根性じゃ、世界で勝てるわけがない。いや、勝てたとしても、あんな奴らに我々の夢を託すなんてまっぴら御免ですよ。田代さんのあのひと言で、僕も目が覚めました」
話していくうちに、則夫自身もだんだん怒りがこみ上げて来たようだった。
「ありがとうございます。そう言っていただけると少しは気が晴れます。それにしても、営業的には…」
田代が、それでも申し訳なさそうに話をしかけた時だった。
「お父さーん！」
射撃場の入口の向こうから、大きな声が聞こえた。
詰襟の学生服姿の少年が、こちらに向かって走って来る。
「師匠！」
則夫の息子の恵造だった。
「やあ、坊ちゃん」
銃造りに関心がある恵造にとって、田代幸吉は尊敬する先生であった。中学校の教師達も扱いに困るほどに手のつけられない悪童の恵造が、唯一礼節を持って接する大人が田代であった。彼は、いつしか田代のことを「師匠」と呼んで敬意を払っていた。

「あれれ…、何か元気がないですね？」
恵造はすぐに田代の異変に気付いた。
「はは…。ちょっと失敗をしてしまってね」
「へぇー。師匠でも失敗することがあるんですか？」
そう言われて、田代がばつが悪そうに則夫の方を見る。
「そういえば、恵造。今日は馬鹿に帰って来るのが早いな？」
則夫が話題を変えようと恵造に訊ねた。
実際、彼が学校が終わってから真っすぐに家に帰って来るようなことは稀であった。
「お父さん、何を言っているんだよ。今日は射撃の凄い人達が来るって言っていたじゃないか」
「そうか。だから、早く帰って来たのか」
「そうさ。隣の笠中の奴らと一戦交えるのを我慢して、すっ飛んで帰って来たんだ…」
そう言いながら、
「あれれ…。そういえば、その人達はどこにいるの？」
恵造は、ガランとした射撃場の周辺を不思議そうに見渡した。
「残念だったな、恵造。その選手の人達は、たった今、帰ったところなんだよ」
「え、そうなの？ だって、お昼過ぎ頃来るって言っていたから、間に合うと思ったんだけど、もう帰ったのか。ちぇっ！」
がっかりする恵造の姿を見ても、則夫達はさっき起こった事実をそのまま話す気にはなれないでいた。
「ま、いいか。で、その人達はうちの新しい銃を気に入ってくれたの？」
その恵造の問いに、再び則夫と田代が困ったように顔を見合わせた。
「それが、駄目だったんだよ」
しかたがなく、則夫が答えた。
さすがに、それについては正直に話さざるを得なかった。
「え、何で？ だって、あれはお父さん達の自信作でしょ？ 世界に通用する銃なんでしょ？」
「うん。それはそうなんだが…」
「師匠、何でですか？」
「う、うん。それは…」
答を求められて、田代は返答に詰まった。
「そうか、わかった。大したことない人達だったんですね？ 世界には通用できない人達だったんですね？」
はたと思いついたように、恵造が言った。
「そうだよ、そうに決まっている。そんなレベルの低い奴らに、うちの自信作を持たせるわけにはいかないな…。うん、そうに決まっている！」
恵造には、彼なりにその結論に自信があるようだった。
「おまえには、それがわかるのかい？」
則夫が、訊ねた。
「勿論、わかるさ。だって、師匠の造った銃の良さがわからなかったんだから、そうに決

まっているじゃないか。一流の競技者は銃の良し悪しがわかるって、師匠がいつも言っている。だから、今日来た奴らは違うんだよ。本当はたいしたことないんだよ」
それを聞いた則夫は、この時ほど自分の息子が誇らしいと思ったことはなかった。
「そうなんだ。そのとおりなんだよ。よくぞ言った、恵造！」
則夫は、大喜びで恵造を褒めた。
「ははは…。聞きましたか、田代さん。恵造の言うとおりですよ。銃が悪いのではない。あいつらに見る目がないんだ。あいつらのレベルでは、我々の銃の良さがわからないんだ！」
まさに我が意を得たりというように、則夫が田代の方を見た。
田代が目がしらを熱くして、何度も、何度も頷いていた。

十二．相談ごと

茨城県北茨城市山間部―。
「よし、行け！」
慎一郎の合図とともに、レオが水辺の藪の中へ勢いよく走り込んだ。
すぐ近くに獲物が潜んでいることは、レオの反応で確信していた。この五年間で両者の意思疎通は、阿吽の呼吸以上に確かなものになっていた。そして、慎一郎はレオの能力に絶対の信頼を持っていた。
並の犬は、地面に鼻をこすらせながら獲物の残した臭いを追っていく、いわゆる「地鼻」を多用する。だが、これだと獲物にたどりつくまでに時間がかかってしまい、寄りついた時には逃がしてしまうことが多い。
充分に訓練されたレオは、地鼻は補助的に使い、「高鼻」を多用する。高鼻とは、空気中に漂う様々な匂いの中から獲物の発する臭いを嗅ぎ分ける能力のことである。それを感知すると、レオは慎一郎に向かって小さく吠えて知らせるのである。知らせを受けた慎一郎は、すぐに発砲の準備に取り掛かる。釣り竿のケースの中から散弾銃を抜き出して、素早い動作で手際良く組み立てる。そのスピードが命だ。次に、釣りの道具箱の下の段に隠してある散弾を四発取り出し、二発はポケットに、二発は銃に込める。念のために、爆竹とマッチも外に出しておく。これは、もし誰かに見つかりそうになった時のカモフラージュの為だ。
そして、準備が整った慎一郎から合図を受けると、レオは電光石火のごとく獲物に向かって突き進んでいく。鴨鳥達は突然向かってくるレオに驚き、追い立てられるように回避飛行を始める。
慎一郎は、その方向に狙いを定めた。
パーン、パーン。
わずか二秒足らずの間に二発の銃声が響き渡り、勝負は一瞬でついた。数十メートル先の空に、二羽の鴨が落下していくのが確認できた。
慎一郎は、確実に銃の腕を上げていた。狙った獲物は、ほとんど外すことがなかった。十一歳の頃から、こっそりと散弾銃の練習を始めてもう六年になる。彼は愛犬とだけでは

なく、銃とも意思の疎通を図れるようになっていた。
その銃は、以前父の慎作が客から借金の形に取ったものだった。ある日、こっそりそれを山の中に隠したのだ。無論、父や菊枝には秘密である。釣りに行くと偽って、山に入っては練習に励んだ。その間、何度か人に見つかりそうになったことがあったが、その都度機転をきかせて乗り切ってきた。
しばらくすると、レオが一羽目の鴨を口に咥えて慎一郎の所に戻ってきた。慎一郎は黙って頷く。だが、この時はまだそれ以上の迎え方はしない。仕事は、まだ途中だからだ。レオは振り返って、再び高さが一メートルほどの密生している藪の中に戻った。
三分ほどして、もう一羽を咥えたレオが戻ってきた。今度は全身が濡れている。おそらく、二羽目は沼地に落ちたのであろう。鴨を口から離すと、しっぽを大きく振りながらレオは慎一郎に向かって誇らしげに大きく一度吠えた。
「ご苦労さん。よくやったぞ！」
今度は慎一郎は、満面の笑みでレオを称えて全身を撫でてやった。
慎一郎は、仕留めた二羽の鴨を、網の袋に入れて二重底になっている釣りの道具箱の中に隠した。捕獲した獲物は、小さい頃から顔見知りの肉屋が内緒で買い取ってくれていた。特に、今日捕った鴨類やキジなどは料亭などに高く売れる為にいい値段で引き取ってもらえた。彼は、そうして得た小遣いを散弾銃の弾代や乗っているバイクのガソリン代などに充てていた。
「よしよし。水に濡れながら、よく頑張ったな」
手拭いで、レオの体を拭き始めた時だった。
レオが、森の方に向かって吠えた。
一瞬、慎一郎は警戒して散弾銃に手をかけたが、鳥類や森の中の動物でないことはレオの吠え方ですぐにわかった。しかも、しっぽを振っている。
「慎ちゃん、撃つな。俺だ！」
森の中から、姿を現わしたのは確かに動物ではなかった。
だが、黒い学生服を着た大柄なその風体は、熊と見紛うほどであった。それは、親友の工藤辰夫だった。
「何だ、辰夫か。熊かと思ったぞ」
慎一郎は、安堵して銃から手を離した。
「危ないじゃないか。下手をすると、散弾を食らうところだぞ。どうしたんだ、こんな所まで？」
「悪い、悪い。急用だったもんで」
言いながら、辰夫がレオの頭を撫でてやる。
レオは、嬉しそうにしっぽを振って応える。
「何だ、おまえ。随分濡れているじゃないか？」
辰夫が、レオの体を触ってそのことに気づいた。
「ちょうど今、沼の中に入って仕留めた鴨を捕ってきたところだ」
「そうか、今日は鴨が捕れたのか？ もう、そういうシーズンなんだな。…ということは、そろそろ見回りが始まるな」
「ああ、もうすぐ本格的な猟期に入るからな。いつ来てもいいように、念の為の準備はし

てあるよ」
慎一郎は、きっぱりと言い切った。
十一月の半ばから、禁猟区以外での狩りが解放される。それはちょうど、鴨達が飛来してくる時期でもあった。その為に、直前のこの時期になると、早めに荒稼ぎをしようとする輩がいる。それを防ぐ為に、地元の猟友会は見回りを始めるのだ。
「相変わらず、おまえのご主人様は抜かりがないよなぁ」
慎一郎の代わりに手拭いで体を拭いてやりながら、辰夫がレオに話しかける。
わかってか、わからぬかはともかく、レオは気持ちよさそうに鼻を鳴らして応えていた。レオはその相手が、自分の主人が一番心を許す人間だと言うことを知っている。だから、自分も心を許していいのである。
辰夫とは、中学時代からの親友だった。慎一郎が家族以外で、初めて心を許した男だった。慎一郎は、小学生時代は友達を作らなかった。早くから大人びていた彼は、同年代の子供にはまったく関心が持てなかったからだ。だが、中学に入って初めて同年代で対等に付き合える男と出会った。それが、工藤辰夫だった。辰夫は、慎一郎と同じように単に体が大きいだけではなく、その発想や行動が子供のそれを大きく超えていた。二人はすぐに意気投合した。
辰夫が並外れて大人びている理由もすぐにわかった。彼は、あの工藤健吉の息子だったのだ。父親同士が親しいこともあって、文字通り、家族ぐるみの付き合いが始まった。慎一郎は、父親同様に健吉にもたいそう気に入られていた。
「それにしても、辰夫。おまえ、よくここがわかったな？」
「うん。慎ちゃんの家に行ったら、菊枝さんが、おまえは山に行ったと教えてくれたんでな。来てみたら、山の入口におまえのバイクを見つけたんで、見当をつけて歩いてきたんだ。森の中で、迷いかけたら、ちょうどさっきの散弾の音が聞こえたってわけだ」
「なるほど」
納得しながら、慎一郎は銃の手入れを始めた。
三つほどに分解し、それぞれに丹念にオイルを塗ってやる。その間、辰夫はレオとじゃれ合っている。
再び、レオが森の方に向かって吠えた。
「どうした、レオ？」
撫でていた辰夫が訊く。
慎一郎は、警戒して釣り竿のケース中に隠してある散弾銃に手をかけた。何かが、近づいて来ているのだけは確かだった。レオの吠え方で、その相手が少なくとも森の中の大型動物でないことだけはすぐにわかった。だとすれば、それは人である可能性が高い。
「辰夫、例の見回りかもしれん。釣り竿をケースから出せ！」
そう命じながら、自分は道具箱に忍ばせてあった爆竹の燃えカスをあたり一面にばらまいた。
はたして、森の中から姿を現わしたのは確かに人だった。年配の二人組の男だった。風体からして、地元の猟友会の男達のようだった。銃は持参していないが、二人が同じ黄色い蛍光色のベストを着ていたので、遠目でもすぐにそう判断できた。
「なんだ。図体はでかいが、まだ若者じゃねえか…」

近づいてきた男の一人が、ほっとしたように言った。
「おめえら、大津工業の坊主か？」
辰夫の学生服の校章に気がついて、もう一人が訊いた。
「うん。そうだよ」
辰夫が答える。
「釣りでもしとったか？」
「まあ、そんなところだ」
男達が、あたりに散乱している爆竹の跡に気がついた。
「おい、おめえら。川の魚を取るのに爆竹を使っちゃいかんぞ」
一人がそう言うと、
「そうだ、いかんぞ。条例違反じゃぞ」
と、もう一人が続く。
「すみません。叔母ちゃんが食べる分だけです。川魚が好物で、持って帰ってやると、とても喜んでくれるんです。これからはやらないようにしますから、今回だけは目をつぶって下さい」
始めて、慎一郎が口を開いた。
「そうか、叔母ちゃん孝行の為か。まあ、そんな程度なら良かろう。商売にしていなきゃいいんだ」
男達の表情が、穏やかになった。
叔母の菊枝の事を理由にしたのは正解だった。逆に、好感を持たれたようだった。それに、もともと彼らは、川魚の密猟を取り締まる為にやってきたわけではなかった。
「それに、わしらは、そんなことを注意する為にここに来たんじゃないわい」
「えっ…。だったら、おっちゃん達は、何をしているんだ？」
辰夫が、わざとらしく訊ねた。
「うん。山の中を見回りしていたら、さっきこっちの方から火薬の破裂するような音が聞こえたんで、見に来たんじゃ」
「わしらは、地元の猟友会の者なんだがのう。もうすぐ、猟期に入るんじゃ。そうなると、その解禁の前に鴨なんかを根こそぎ捕って行こうとする輩がおるんじゃよ…。まあ、たいがいはよそ者じゃがな」
「だから、わしらは猟期の直前は、こうして交代で密猟の見回りをしておるんじゃ」
男達が、交互に説明した。
「そうか。それで、あの爆竹の音に…？」
「まあ、そういうこった」
「そいつは、おっちゃん達。紛らわしいことをしてしまって、すまなかったな。わはは…」
そう言って、辰夫が豪快に笑った。
「ははは…。いいってことよ」
男達は、すっかり辰夫の話を信じ込んでしまっていた。
「まあ、そういう意味では、ちょうどよかった。おめえらも、よく覚えておけ。来月から、狩猟期間に入る。そうなると、とても危ねえからな。むやみに、この辺りをうろつくんじゃねえぞ。わかったな」

「ああ、わかった。近づかないように気をつけるよ」
辰夫がそう言うと、年配の男達は山の中に戻って行った。
男達の姿が完全に消え去ると、辰夫はほっと肩で息をしてから、得意気に慎一郎の方を見た。
「わはは…。行っちまったぜ、慎ちゃん」
大きな手でＯＫマークを作る。
「ご苦労さん。なかなかの名演技だったぞ、辰夫」
慎一郎が笑顔で、親友の労をねぎらった。
「それはそうと、辰夫。その急用というのは、何なんだ？」
ふと、思い出したように慎一郎が訊く。
「ああ、そうだった…」
急に、辰夫の顔が真剣になった。
「実はさっき、水戸工業から果し状が届いた」
「果し状って、決闘の申し込みのことか？」
「まあ、そういうことだ」
「原因は、この間の例のあれか？」
「そうだ」
例のあれとは、先日行われた野球の県大会の準決勝でのことだった。
二人が通う大津工業高校と水戸工業高校との試合だった。この試合には、翌春の甲子園の選抜の出場がかかっていた。試合は白熱した接戦だった。だが、同点の九回にひとつの判定を巡って両軍の選手達が殴り合う乱闘になってしまったのだ。結局、その試合は没収試合となり、両校とも決勝に進むことはできなかった。収まらなかったのは両校の選手や生徒達であった。だが、両校ともに野球連盟から対外試合の停止処分を受けてしまった為に、野球の試合での決着はつけることができなかった。
そのもどかしさの状況の中から、どちらともなく野球以外での決着の話が出てきていたのだ。血気盛んな若者達は、何かの形で決着をつけなければ気持ちが収まらなかったのだ。
「で、どんな内容なんだ？」
「双方から、ひとりは野球部の主将で、他に二人出してやる」
「つまり、三対三のタイマンか？」
「ああ、そうだ」
「そうなると、こっちは野球部の桐島に、おまえということか？」
「ああ、当然そうだ」
「そうすると、もう一人は誰にするんだ？」
「勿論、慎ちゃんだよ」
辰夫は、それも当然のことだと言わんばかりに答えた。
「なるほど、そういうことか…」
「それ以外ないだろう。久しぶりに二人で組んで、ひと暴れしようぜ」
「おまえは、番長を張っているんだから仕方がないにしても、俺は野球部には何の義理もないぞ」
慎一郎の方は、たとえ相手が大親友であっても、安易な妥協はしない。

「ああ、わかっている。慎ちゃんはガキの遊びには興味がないからな。だけど、野球部にはなくても、俺の為に付き合ってくれよ」
「そういう言い方をされると辛いな。他に誰か適当な奴はいないのか？」
「そりゃあ、腕っ節の強い奴は何人かはいるが、どいつも頼りにはならない」
「何でだ？」
「度胸がないんだよ。親父もよく言っている。喧嘩は、度胸でやるもんだって。腕っ節はその次だって」
　辰夫が、そう言いながら空を見上げた。
　自分の言葉に感動した時に、彼が必ずやるポーズであった。
「ははは…。確かに、健吉親分はそれが口癖だよな」
　そんな彼の仕草を見て、慎一郎はつい笑ってしまった。
「真面目に考えてくれよ、慎ちゃん」
　辰夫は、ちょっとばつが悪そうに怒った。
　彼は心底父親の健吉が好きだった。憧れてもいた。堅気な商売ではないが、何よりも町の誰からも愛されていた。そして、頼りにされていた。普段は、どこにでもいる人のいい親父だった。だが、それが町の外敵と対峙する時は一転、誰もが震えあがる鬼と化した。まさに、男の中の男であった。辰夫はそんな父を誇りに思っていた。だが、それは同時に辰夫のコンプレックスでもあった。
「悪い、悪い。おまえの仕草が、いかにもって感じで、つい…。でも、本当に俺でいいのか？」
「慎ちゃん以外にいないよ。慎ちゃんは、その両方を持っている。喧嘩も強いが、何よりも胆が据わっている。そっちの方は、悔しいけど俺よりもあると思う」
　二人は中学生の頃から、何度も修羅場をくぐってきた。
　相手は、いつも上級生か高校生だった。だが、相手が誰であろうと二人は無敵だった。そして、慎一郎は喧嘩においても相手を呑みこむ度胸を持っていた。そのことは、誰よりも辰夫が知っていた。
「それに、今回の相手は今までとはちょっと違うんだ」
　再び、辰夫の顔が真剣になった。
「というと？」
「下手をすると、かなりやばいことになる」
「どういう意味だ？」
「相手の柱になる水戸工業の三上という野郎は、かなりの奴らしい。まあ、それだけなら問題はないんだけど…」
「どうした、辰夫？」
　辰夫の深刻な表情は、ただならぬ状況を予感させた。
「奴の実家は、鉄砲を造る会社なんだ」
「ほう」
　同じ茨城県内に、有名な散弾式銃の製造会社があるということは、慎一郎も聞いたことがあった。
「自分で言うのもなんだけど、大津工業の工藤と言えば、県内ではたいがいの奴は一目置

いている。それが証拠に、今じゃ、誰も手を出してこようとしない。そんな俺の所に喧嘩の申し入れをしてくるとなれば、それ相応の「用意」をしてくるんじゃないかと思うんだよ」
「つまり、今度の喧嘩に、銃を持って来ると言うことか？」
「ああ、そうだ」
「まさか、そこまでは…」
「いや、おおいにありえるよ。だから、慎ちゃんにも来てもらいたいんだよ」
「なるほど、そういうことか。それなら、俺が行かざるを得ないな」
「ありがとう、慎ちゃん。これで安心した。ここまで探しに来た甲斐があったぜ」
辰夫は、嬉しそうにレオの頭を撫でた。
「で、いつなんだ？」
「今度の金曜日だ」
「金曜日か、時間がないな…。で、場所は？」
二人は、その場で緊急の作戦会議を始めた。

十三．決闘

三日後、茨城県日立市―。
国鉄常磐線の日立駅から、内陸に二キロほど入った山の一帯に、かみね公園がある。
その山の中腹に、野球場が丸々一つ入るほどの大きな広場があった。普段はあまり使われないこの広場は、公園が満杯になった時の臨時の駐車場だった。夜になるとほとんど人は立ち寄らない場所であり、秘密の決闘にはもってこいだった。水戸市と北茨城市のちょうど中間にあることからここが選ばれたのだ。この日は、カップルの車が一台だけ止まっていたが、その異様な雰囲気を察してすぐに立ち去った。
三上恵造は、仲間の野球部員二人と広場の入口付近で相手を待っていた。
三人とも忍者が持つ刀のように、背中に細長いケースを背負っていた。二人のは野球のバットケースだが、恵造のだけはそれよりも一回り大きなケースだった。
夜の七時を回った頃、轟音を響かせて二台のバイクがやってきた。
二台は、恵造達の十メートル手前くらいの所で急停車し、しばらくドッドッという排気音を轟かせて停車していた。
「バイクかよ。しかも、三人共かなりデカイぞ…」
恵造の連れの二人の野球部員達は、この時点で早くも気遅れ気味になっていた。
だが、恵造だけはその闘志にいささかの衰えはなかった。
「ふん、まるでカミナリ族気取りだな」
自分には、そんなこけ脅しなど通用しないぞと言わんばかりにそう切って捨てた。
そのうちに、工藤辰夫とその後ろに同乗していた野球部主将の桐島が、ゆっくりとバイクを降り立った。辰夫は手ぶらだが、桐島の背中には恵造達と同じようにバットケースが袈裟がけに背負われていた。
続いて、慎一郎がゆっくりとバイクを降りた。

辰夫と慎一郎は付けていたゴーグルをほぼ同時に外すと、恵造達のことなど気にも留めていない様子で、互いに顔を見合わせてニヤリと笑った。
そうしてから、やっと辰夫が恵造の方に顔を向けた。
「おまえが、三上か？」
「ああ、そうだ。工藤か？」
「そうだ」
「始める前に一応聞いておくが、今日のことは誰にも知られていないんだろうな？」
太い眉の下のギョロっとした大きな目で、辰夫が睨むように辺りを伺う。
「ああ、大丈夫だ。この三人しか知らねえ。そっちは？」
「勿論、大丈夫だ。それじゃあ、気兼ねなくやるとしようぜ」
「望むところだ」
思い出したような素振りで、辰夫が恵造に訊いた。
「ところで、三上。野球部の奴がバットを武器に持ってくるのはわかるとして…。おめえのそのケースは、バットにしちゃあ、随分とデカイな？」
始める前に辰夫は、恵造のケースの中身の確認をしておく必要があった。
「ふふふ…、気になるのか？ 念の為の「道具」だよ」
恵造が、意味深に返す。
「言っておくが、ヤクザの出入りじゃあるまいし、高校生同士の喧嘩に飛び道具はなしだぜ」
辰夫が危惧した通り、どうやらそれは銃のようだった。
「言っただろう。念の為だよ。何と言っても、おめえの親父はそのヤクザだからな。応援に兵隊でも連れてこられたんじゃ敵わないからな」
恵造が散弾銃を持参したのには、そういう理由があったのだ。
わからなくもない理由であった。だが、そのひと言は辰夫に火をつけてしまった。よりによって、彼が最も言われたくない部分のことだったからである。
「この野郎、ふざけたことをぬかしやがって。大津工業の工藤辰夫を見くびるなよ。自分の喧嘩に親の力を借りたことなんぞ、一度たりともないわ！」
そう怒鳴りながら、辰夫は同意を求めるように慎一郎の顔を見た。
慎一郎は、その通りだから気を落ち着かせろという仕草で、辰夫に向かってゆっくりと頷いて見せた。相変わらず、こんな場面でも彼は落ち着きはらっていた。
それから慎一郎は、自分の釣り用のケースを指差して辰夫に合図を送った。それに気づいた辰夫は、思い出したように頷いて返した。彼は目をつぶってひと呼吸入れ、昂る気持ちを落ち着かせ、それから言った。
「まあいいだろう。こちらも、おまえと同じ「念の為の道具」の用意はして来てあるからな」
慎一郎の釣り用のケースを見ながら、勿体ぶったように辰夫が恵造に言う。
恵造の視線がそのケースにくぎ付けになった。
「ま、まさか！」
「ふふふ…、その、まさかだよ。用意してきたのは自分だけだと思うなよ、三上」
辰夫は、自信に満ちた顔で言いきる。

「嘘だろう。俺はともかく、普通の高校生が簡単に持てるもんじゃねえ！」
「信じられないなら、その目で確かめてもらおうかね」
辰夫がニヤニヤ笑いながら、慎一郎に「それ」を促した。
はたして、釣り用のケースの中から出て来たのは、分解された散弾銃だった。しかも、慎一郎は目にもとまらぬ速さで、それを組み立てて見せた。いかに、その銃を使い慣れているのかが、誰にでも伝わる素早い動作だった。
恵造の方の三人に加えて、こちら側の桐島までもが「おおっ」と、声にならない驚きの唸りを上げた。それは、相手を威嚇するのには充分過ぎるほどのパフォーマンスになっていた。この時ばかりは、さすがの恵造も他の二人と共に圧倒されて、後ずさりをした。
「み、三上。あれは本物なのか…？」
恵造の後ろの二人が、恐る恐る訊く。
「ああ。どうやら、そのようだ」
悲しいかな、恵造にはその判別がつけられる。
「ふふふ…。驚いたか、三上？」
辰夫は、勝ち誇ったように言う。
「そ、そんなこけ威しに乗るか。どうせ、どこかの猟をやるオヤジかなんかから、借りて来たんだろう。それとも、やっぱりおまえの親父からか？」
苦し紛れに言った恵造のそのひと言は、また辰夫の怒りのツボを突いてしまった。
「くどいぞ、三上。親父の世話になったことはないって、言ったばかりだろう！」
再び、辰夫の頭に血が上った。
「こけ威しじゃないよ。本当に俺の銃だよ」
その時、初めて慎一郎が口を開いた。
穏やかな口調だった。辰夫を落ち着かせる為だった。こんなに緊迫した空気の中での、その落ち着いた素振りは、逆に相手に凄味を感じさせた。特に、場数を踏んでいる恵造にはそれが伝わった。
「おまえ…。名前は？」
「近衛慎一郎」
「近衛か、馬鹿に落ち着き払っていやがるな？」
その時、恵造の後ろにいる部員の一人が言った。
「近衛って、聞いたことがあるぞ。大津工業にもう一人凄いのがいるって。しかも噂では、そいつは工藤よりも強いかもしれないって評判だ。その名前が確か、近衛だよ！」
「このガキ、俺より強いってのは訂正しろ。俺ぐらい強いって意味だよ！」
辰夫が、敵側にいちいち訂正を求めた。
「そうか…。で、近衛とやら、おまえはその銃を撃ったことがあるのか？」
恵造が慎重になっていた。
信じたくはないが、落ち着き払った態度とさっきの組み立ての素早さから察して、その相手が銃の扱いに手慣れている可能性が極めて高いと判断できたからだ。
「撃ったことがあるか、だと？ わははは…、こいつはお笑いだぜ」
恵造の慎一郎への問いかけに、辰夫の方が笑って答えた。
「残念だったな、三上。それどころの騒ぎじゃないぜ。こいつの腕前は、半端じゃねえ。

狙った獲物は必ずしとめる。百発百中なんだよ！」
辰夫が笑いながら、慎一郎に目線を送る。
慎一郎は、うつむいてニヒルに笑みを浮かべる。
「嘘だ。信じねえぞ。高校生のガキが、そんなに使いこなせるわけがねえ！」
恵造が、焦ったように叫んだ。
「自分で言うのもなんだけど、かなりの腕前だよ。何なら、お見せしようか？」
今度は顔を上げて、慎一郎本人が答えた。
やはり、物静かな中に凄味がある。
「おお、上等だ。見せてもらおうじゃないか！」
引っ込みがつかなくなった恵造は、そう答えるしかなかった。
「じゃあ、そうしようか」
言いながら、慎一郎がケースのポケットから弾を四つ取り出した。
「ほ、本物の弾だぞ。あいつ本気だ！」
再び、恵造側の二人がざわついた。
「そこの二人、野球部員だよね？」
慎一郎がその二人に訊く。
「そ、そうだ…」
すでに、二人は凍りついたようになっている。
もはや、喧嘩どころではなかった。完全に戦意を喪失しているのは、誰の目にも明らかだった。
「二人のうち、どっちがノックがうまいんだ？」
「ノ、ノックって？」
「野球の練習でやるノックだよ。どっちだ？」
「お、俺だけど…」
主将の方が恐る恐る答えた。
「じゃあ、その辺で、ノックでフライが打てそうな大きさの石ころを何個か拾ってきてくれ」
敵方の慎一郎に命令された二人は、言われるがままに応じていいのかわからず、恵造の顔色を伺った。
「いいから、早く探してこい！」
恵造が許しを出すのを待たずに、この日始めて発せられた慎一郎の大声が、野球部員達を追い立てた。
二人は、石のありそうな広場の端の方へ走っていった。
「近衛。おまえ、いったい何を考えているんだ？」
恵造は、この場でのそんな慎一郎の指示の意図がまったくわからない。
「まあ、見ていろよ」
辰夫が、腕組みをしたまま意味深にニヤニヤと笑って言う。

十四．収拾の仕方

慎一郎達三人と三上恵造の沈黙の対峙が一、二分続いた。
しばらくして、ハアハアと息を切らせながら水戸工業側の野球部員達が戻ってきた。手にはそれぞれ二個ずつ、野球のボール大の石を持っている。
「ご苦労さん。…さて、三上。できれば俺も、こいつで人なんかは撃ちたくない。そこで、提案なんだが…」
慎一郎は、再び穏やかな口調に戻っていた。
「これから、彼にバットでその石をノックしてもらう。空に向かってな。それを俺が撃ってわけだ。まぐれだとは思われたくないんで、三発ということにしよう。それ以上続けても、誰かに気づかれる心配もあるしな…。で、もし三発とも空中で石を撃ち抜けたら、こっちの勝ち。一発でも外したら、そっちの勝ちというわけだ。それで、今回の決着をつけようじゃないか」
「な、何を言い出すかと思えば…。ははは…」
提案された恵造は、その馬鹿馬鹿しさに笑うしかなかった。
「そんなことができるわけがないだろう。おまえは、やっぱり銃の素人だな。三発どころか、一発も当たらねえよ」
それが、絶対に不可能であることは、散弾銃の何たるかを誰よりも知る恵造が、わかりすぎるほどわかっていた。
「桐島は、それでいいか？」
そんな恵造の反応などは無視して、慎一郎が、まず自分の方の野球部の承諾を問うた。
「ああ、いいぜ」
大津工業側の野球部主将は、その提案を呑んだ。
「おい、近衛。おまえ、まさか本気で言っているのか？」
恵造は焦った。
はったりにしては、慎一郎はあまりにも平然としていた。
「勿論だよ。で、そっちの方はどうなんだ？」
慎一郎は、あくまでも真顔だった。
「お、面白いじゃないか。やってもらおうじゃないか」
恵造が承諾した。
他の二人には聞くまでもなかった。
「じゃあ、それで決まりだ。それで、恨みっこなしだぞ」
そう言うと、慎一郎は皆から十五歩ほど後ろに下がって、散弾銃をかまえた。
「よし、おまえ。向こうの空に向かって、思いっきりフライを打て」
「わ、わかった」
慎一郎に、言われて恵造側の主将が、ボール大の石をノックしようとした。
だが、バットは石に当たらず、大きく空を切った。
「ははは…、落ちつけよ。一回、深呼吸でもしろ」
そうアドバイスしたのは、敵方の辰夫だった。
「くそっ、試合より緊張するぜ…」
そう呟きながら、主将は辰夫に言われたとおり、その場で大きく深呼吸をした。

屈伸運動をし、更にバットの素振りを何度かした。
「うん、いいスイングだ。さすがは、野球部の主将だ。それなら大丈夫だ」
わかったように辰夫が評論する。
彼は余裕たっぷりだった。
「よし、今度は大丈夫だ。じゃあ、いくぞ」
水戸工業の主将が、バッティングに集中できたようだった。
「よし、打て！」
慎一郎が合図した。
今度は、石をバットの芯でとらえた。カーンという乾いた音とともに、石が夜空に打ち上げられた。
その直後。パーンという発射音とともに、石はものの見事に空中で散弾に砕かれた。
「おおっ！」
恵造達と桐島が驚きの叫びを上げた。
「次だ…。次を打て！」
慎一郎は、顔色一つ変えずに命じた。
いったん撃ち始めたら、なるべく早く終えなければならない。もし他の誰かに目撃されれば、通報されてしまうからだ。音だけならばまだ、爆竹花火の遊びということでごまかすことができる。慎一郎は、常に散弾と一緒にケースの中に遊び用の爆竹を忍ばせていた。それは、慎一郎が今まで地元の山の中で秘密練習をする時の非常時のごまかし方であった。未成年の彼だからこそ使える手口であった。
促されて、主将が次のフライをノックした。これも、大きく飛んで行った。
再び、石は空中で砕かれた。
「ば、馬鹿な！」
恵造は、茫然としていた。
「次だ。もたもたするな！」
慎一郎が促す。
間を入れずに、三つ目のフライが打ち上げられる。
そして、三たび粉砕された。
「し、信じられん…」
恵造は、とても受け入れられない事実を突き付けられていた。
彼の驚きは、他の三人とはまた別の次元のものであった。彼は、小さい頃から何人もの一流の射撃を目の当たりに見て育ってきた。射撃の限界を誰よりもわかっているのだ。慎一郎のそれは、常識を超えていた。人間業ではなかった。
「これで、終わりだ。約束は守ってもらうぞ」
何事もなかったかのように、慎一郎が言う。
「あ、ああ…。わかって…いる」
慎一郎の言葉に、恵造はそう答えるのが精一杯だった。
まだ、受けた衝撃から立ち直れないでいた。
「よし。では、両校の野球部の主将同士で握手といこう」
辰夫が、音頭をとった。

「なかなか、いいノックだったぜ」
桐島が手を差し出し、水戸工業の主将と握手を交わした。
それを皮きりに全員が交互に握手を交わした。それによって、今までの張り詰めた空気が一転して、一気に和やかな雰囲気へと変わっていった。
「よし。これで、今回の件は、めでたく手打ちとなった！」
辰夫が、満足気に大声で締めた。
これこそが、辰夫と慎一郎で描いたとおりの収拾の仕方であった。
慎一郎が銃を片付け始めると、恵造が近寄ってきた。
「近衛。…いや、近衛君。その銃、見せてくれるか？」
「ああ、いいよ」
恵造は、慎一郎の銃をいじり始めた。
その姿は、さっきまで見せていた武骨な雰囲気とはまるで別人のようだった。そして、こちらの方が本来の三上恵造の姿なのかもしれないと、慎一郎は感じとっていた。
「やっぱり、そうだったか…」
恵造がつぶやいた。
「何がだ？」
「見覚えがあったんで、よもやと思ったんだが…。これは、うちの会社の銃だよ」
「そうだったんだ。ＭＪってのは君のとこの会社か」
「ああ…。型は古いが、なかなか良く手入れをしているな。使っている銃を見れば、その人間の人柄が表れるもんだ。君は、銃を大切にしている人間のようだ」
「自己流だがな」
「うん、それでいいんだ。だが、そろそろオーバー・ホールをした方がいい」
「オーバー・ホール？」
慎一郎には、聞き慣れない言葉だった。
「ああ。銃を完全に分解して、すべての部品のひとつひとつを点検して、整備するんだ。場合によっては、部品の交換が必要な時もある」
「そうか。そこまでは、考えていなかった」
「近衛君。さっき打った弾の、空の薬きょうを貸してくれるか？」
「ああ、いいけど。どうしようというんだ？」
言いながら、慎一郎が上着のポケットから空の薬きょうを取り出して、恵造に手渡した。
「まあ、見ていろ」
そう言いながら、恵造は受け取った空の薬きょうを銃に込めた。
そして、引き金を引く。無論、空なので散弾は発射されない。カチャッと撃鉄の打つ音だけがする。恵造は、もう二度、三度同じ動作を繰り返す。
「やはりな…」
恵造が、睨んだ通りという感じで呟いた。
「何をしているんだ？」
慎一郎が、興味津々に訊ねる。興味を持つなと言う方が無理だった。
「うん。引き金の調子を見ている。悪い銃ではないが、この銃は、もともと狩猟用の銃なんだ。だから、引き金も狩猟用に重く設定されている。約２キログラムの重さだ。それだ

と、クレー射撃には不利だ。重すぎるんだ。1．5キログラムくらいに設定し直した方がいい」
「そんなことができるのか？」
「俺ならばできる。撃鉄と逆鉤の嵌合角を削って調整するんだ。そうすれば引き金は軽くなって、君の射撃の反応はずっと向上するはずだ。その時に、撃鉄のバネも交換した方がいいだろう」
「あ、ああ…」
そうとしか、慎一郎は言葉を発せられなかった。
恵造の専門的な用語を駆使する説明に圧倒されたのだ。
「他にも改善すべき部分は山ほどありそうだ。オーバー・ホールは、早いところやった方がいい。…よかったら、俺にやらせてくれないか？」
意外な申し出だった。
「えっ…。いいのか？」
「ああ、これも何かの縁だ。こう見えても俺は、銃の整備ではけっこう筋がいいと言われているんだぜ」
恵造の脳裏に、師匠格にあたる田代幸吉の姿が浮かんでいた。
「何となく、俺もそう感じていたよ。正直言って、君の説明に圧倒されていた」
「ははは…、そうか。それじゃ、決まりだ」
そう言って、恵造が右手を差し出した。
二人は改めて固い握手を交わした。恵造は、嬉しそうだった。
「よろしく、頼む！」
慎一郎も、笑顔で応じた。
互いに共通する最も好きなものが、二人の若者の心を一気に通わせた。
「それはそうと、近衛君は本物のクレーは撃ったことがあるのか？」
「いや。実は、それは一度もない。チャンスがあれば撃ちたいとは思っているんだが、知ってのとおり、この年齢ではなかなか撃てる機会がないんだ」
「そりゃそうだ。そんなのがばれたら、警察沙汰になっちまう。だったら今度、友部町に来てみないか？」
「友部？」
「ああ、うちの実家の工場がある町だ。水戸から少し内陸に入ったところだ。そこにはうちのクレー射撃場もある」
「そいつは、ありがたい。是非、頼む！」
「お安い御用だ。その時に、一緒にこの銃の整備もやろう。引き金の調整の時も、本人の君がいないと困るしな」
「それは、願ったりだ。だけど、会社の人とかに見つかったりしないのか？」
「来週の平日は、何とかなるか？」
「ああ。学校を休むのは、まったく問題ない」
学業成績が優秀な慎一郎にとって、一週間程度の休みは何でもなかった。
特に、中でも英語力は天賦の才があったようで、英語教師も一目置くほどの実力を持っていた。

「だったら、大丈夫だ。君は運がいいぞ。ちょうど、月曜から木曜日まで社員は誰もいなくなる。毎年、忙しくなる猟期の直前に会社の社員旅行をやるんだ。その時なら、誰もいない。工房も射撃場も、気兼ねなく自由に使える」
「本当にいいのか？」
慎一郎は、更に嬉しさを隠しきれない表情で訊ねた。
「ああ、本当だ。早い方がいい」
「ありがとう。必ず行くよ。さっそく、月曜日からでもいいか？」
「うん、大歓迎だ。できればずっとうちに泊まればいい。近衛君は一度、本物のクレーをやってみるべきだよ。君は恐ろしい可能性を秘めていると思う。なんたって、こんな設定の銃であんなに凄い射撃ができるんだからな」
「ははは…。それは、言葉通り素直に受け取っていいのか？」
「ははは…。勿論だよ」
そこへ、辰夫が割り込んできた。
「おいおい。二人とも、何やら楽しそうな話をしているな。慎ちゃんの嬉しそうな顔を見るのは久しぶりだぞ」
事実、辰夫は自分以外に慎一郎が心底からの笑顔を見せる相手に会うのは初めてだった。そして、ならばその相手は、自分にとっても友人として迎え入れるべき相手なのだと解釈していた。
「そう見えるか、辰夫。それもそのはずだ。来週、三上のところで本物のクレーを打たせてもらうことになったんだ。しかも、銃の手入れもしてもらえる」
「本当か。もう、そんな仲になったのか？」
「まあ、そういうことだ」
「よし、ならば俺も行くぞ。いいな、三上？」
「ああ、大歓迎だよ。だけどおまえ、学校の方は大丈夫か。平日だぞ？」
「大丈夫だ。校長も担任の先公も、親父に頭が上がらないんだ」
そう得意気に言う辰夫であったが、
「何だ、工藤。やっぱりおまえは、親父頼みじゃないか」
と、恵造にからかわれる。
「こ、こいつ、それを言うなと言っただろう」
そう言い返す辰夫も、今度は笑顔だった。
「ははは…。三上に一本取られたな、辰夫」
慎一郎も、釣られて笑った。
「まったくだ。昨日の敵は今日の友とは、良く言ったもんだぜ。わははは…」
三人が、笑い合った。新しい友情の始まりだった。

十五．会話する力

休日の工場―。
ひと気のない工房内の一角で、三上恵造はひとりその銃の改良に没頭していた。

居ても立ってもいられなかったのだ。先週、ＭＪ社の射撃場にやってきた近衛慎一郎の見せたその時の光景が頭から離れなかった。
それは、まさに衝撃のデビューだった。生まれて初めてクレー射撃をやる人間の所業ではなかった。打ち出されたほとんどのクレーは見事に粉砕された。
興奮して褒め称える恵造や辰夫に対して、彼は顔色ひとつ変えずにさらりと言ってのけた。
「直線的なので、思っていたほど難しくはないね。時折、予測に反した動きをする鳥や動物ほどではないよ」と。
だが、最後に笑顔でこうも言った。
「でも、楽しいよ。こんなにワクワクしたのは初めてだ」と。
恵造は、慎一郎のその射撃の凄まじさと、最後に見せた彼の笑顔が忘れられなかった。そして、その両方がもっと見たいと思った。
「坊ちゃん、いらっしゃいますか？」
工場の入口から、声が聞こえた。
「師匠、ここです！」
恵造が答えた。
声の主は工場長の田代幸吉であった。
「どうしました、こんな休みの日に？」
「休日にわざわざ来てもらってすみません。でも、他の社員の皆さんがいては、ちょっと都合が悪いんです」
田代が、木製の大きな作業台の上に置かれた一挺の古い散弾式銃に気付いた。
「ほう。かなり年季の入った銃ですね？」
「はい。実は、こいつを改良したいのですが、なかなか難しくて…」
「ははは…。ここまで型が古いと、さすがの坊ちゃんもわからないことがあったわけですね。それで、私を呼んだということで？」
「ええ、まあ…」
田代はその銃を手に取ってみた。
「狩猟用の銃ですね。…随分と使い込んでいる。でも、手入れはきちんとしてあるようだ」
「ええ。これの持ち主は、きちんと手入れをする男です」
「で、これのどこを、どう改良したいのですか？」
「これを、競技用に改良したいんです」
「ほう、競技用に…。いったいどなたの為に？」
「そ、それは…」
恵造が返答に詰まった。
相手が心を許す田代とはいえ、さすがに「未成年」の友人の為だとは言えなかった。
「わかりました。何かの事情があるのでしょう。その辺は聞かないことにしましょう」
田代は、恵造の意をくんでくれた。
「すみません、師匠。ただ、これだけは言っておきます。この銃の持ち主は、全力で応援してあげる価値のある男です。彼は、クレー射撃の未来を変える力を持っているといっても大げさじゃないんです」

「と言いますと？」
「彼は、この銃で満射＝二十五点満点を何度も出したんです。しかも、生まれて初めてやってです！」
「この狩猟用の銃で？　しかも、初めてやって、満射を何度も？　…とても、信じられませんね」
　業界の主である田代も、それには驚きを隠せなかった。
「師匠は、そんなに凄い男を誰か他にご存知ですか？」
「いや、さすがに私でも…」
　その時、田代はある話を思い出した。
「そういえば、私が以前イタリアに銃の勉強に行った時に知り合った方の話なのですが…。バイオリン職人のロッツィオさんという方の話です。ごく稀に、使うバイオリンを選ばずに名演奏ができるバイオリニストがいるそうです。例え名器であろうが、なかろうが、どんなバイオリンでも、素晴らしい演奏をしてしまうそうです」
「弘法筆を選ばず、ってやつですね？」
「ははは…、まさにその例えがピッタリです。そして、そういう人達に共通しているのが、楽器と「会話」をする力が備わっているということです」
「会話、ですか…？」
「はい。抽象的な表現かもしれませんが、その表現が一番近いのです…。そういう資質を持っている人であれば、使う銃に左右されずに最高の射撃ができるでしょう」
「銃と、会話か…。実際、銃の世界でそんな人はいるんでしょうか？」
「聞いたことはありません。少なくとも、この日本では…。おそらく、世界中を探してもいないのかもしれません。ただ、この銃の持ち主は、その資質を持っているのかもしれませんね」
「そうですね。そうかもしれません…」
　近衛慎一郎こそが、その資質を持つ唯一の人間だと、恵造は感じていた。

十六．限界

　この日も、北九州は、三十度を超える猛暑だった。
「あー、だめだっ！」
　そう叫ぶと、浅尾義和は射撃の練習を中断して、広大な芝生帯の上に座り込んだ。
　そして、麦わら帽子の隙間から流れ落ちる汗をタオルでぬぐいながら考え込む。
　今日も打ち上げたクレーの九割を割ることができた。たった一年余りで、そのレベルまで来ることができていた。それには理由があった。義和の練習環境が極めて特殊で、恵まれているからだ。彼は自分の家の敷地内でクレー射撃の練習ができるのだ。つまり、その気になれば毎日何時間でも練習することができるのだ。小さな山の丸々ひとつが浅尾家の屋敷の敷地であった。ここでは、文句を言う者も、邪魔をする者もいない。文字通りの治外法権である。
　幼い頃からクレー射撃に憧れていた義和は、父親を説得して約束よりも一年早い高校二

年生から練習を始めていた。無論、一般人には絶対に真似のできない芸当である。九州のこの地に王国を築いている浅尾財閥の御曹司だからこそ可能なことであった。

とはいえ、義和自身も自分なりの努力はしてきた。少しでも早く散弾銃を持たせてもらう為に懸命に体を鍛えた。特に好きでもない相撲道場に欠かさず通って、銃の発射の反動に耐えられる体を作っていった。それを見ていた父は、ついに根負けして条件をひとつだけ出して許可をしたのだ。条件とは、学校の成績を落とさないということだった。一度でも成績が落ちたら、その時点でクレー射撃は止めるということだ。父のその条件は、もともと勉強のできる義和にとっては相撲道場に通うことよりも苦ではなかった。義和は、それを難なくこなした。むしろ、成績は以前よりも順位を上げ、夏休みに入る前には志望校の学習院大学の推薦入学の枠を獲得することができた。その時点で、ひと科目ずつに四人もいた家庭教師から一気に解放された。今や、義和は堂々と好きなクレー射撃を満喫できる身であった。

義和のクレー射撃への情熱とこだわりは、並大抵ではなかった。射撃の腕を向上させる為には、あらゆる労苦を惜しまなかった。例えば、父の謙三の場合は使用人を横に待機させて、彼にクレーを発射してもらっているが、それでは好きな時に好きなだけ練習ができない。そこで義和は、自分一人でも練習ができるように足元でクレー発射機のスイッチが入れられるような改造まで施したのだ。

だが、そんな彼もこのところ射撃の伸び悩みを感じ始めていた。

原因の一つは、現在使っている散弾銃にあることは間違いがなかった。父親から借りている銃だ。さすがに高校生の義和は、まだ自分の銃を買うことはできない。法律では、成人するまで銃の所持はできないのだ。その父の銃は、決して悪い銃ではなかった。アメリカ製のレミントンやイタリア製のベレッタは勿論、性能のいい銃である。だが、それが義和自身に合っているのかということになれば、それはまた別の話であった。

義和は自分に合った銃が欲しかった。今はそれが叶わなくとも、少なくとも今持っている銃にできる限りのことはしてみたかった。重さも、バランスも、引き金の反応も、数え上げたらきりがないほどの改善すべき点があると素人なりに感じていたからだ。義和は、居ても立ってもいられなかった。一刻も早く誰かに見てもらいたかった。相談がしたかった。

「よし！」

彼は、水筒の中の麦茶をゴクゴクと飲み干すと、そう叫んで、芝生から立ちあがった。

義和は屋敷の中に走り戻り、電話の番号案内で日本クレー射撃協会の事務局の番号を調べた。東京の渋谷にある岸記念館と言う建物の中にそれはあった。すぐに事務局に電話をかけ、散弾銃を製造する会社の所在地を訪ねた。無論、その時は年齢を偽った。

事務局が教えてくれたのは、三上銃器製造会社＝ＭＪ社という会社だった。世界に通用する散弾銃を造る会社との紹介だった。所在地は、東京からさらに北にある茨城県の友部町という所だった。九州からはかなり遠いが、東京からならさほど遠くはない。来年の春から東京で大学生活を始める義和にとっては、むしろ好都合だった。義和は、迷わず教えてもらったその電話番号をダイヤルした。

十七．父の頼み

「恵造、お父さんだ。入るぞ」
三上則夫が、息子の恵造の部屋を訪ねた。
「ほう。感心、感心…」
恵造のその様子を見て、則夫が感慨深げに言った。
夏休みに入って、恵造はほとんどこの部屋にこもって受験勉強に打ち込んでいた。今日も暑い中、扇風機ひとつで机に向かっている。
子供の頃からずっと手に負えない程のガキ大将だった。だが、昨年の秋あたりから、急に真面目に学校に通い出し、おまけに大学受験の為に勉強に精を出し始めたのだ。最初のうちは戸惑った則夫だったが、ここまで続くと本物なのだと認めざるを得なかった。実際に、最下位が指定席だった学校の成績が、このところ中間よりも上位に上がってきていたのだ。
「しかし、本当に変われば変わるもんだなぁ」
「何だよ、お父さん。冷やかしに来たのか？」
勉強の邪魔をしないでくれと言いたげな風に、恵造の視線は机の上の問題集に注がれたままだった。
「いや。すまん、すまん。おまえに頼み事があってな。でも、もし勉強の妨げになるのなら、あとでいいんだが」
「なんだよ。とりあえず、言ってみてよ」
「実は、さっき一般の人から電話があって、工場の見学がしたいと言うんだ。それが、九州の福岡からわざわざ来ると言うので、お父さんも断り切れなかったんだ」
「へえー。九州からねぇ…」
恵造の視線は問題集から離れない。
「ああ、そうなんだ。えらく熱心な人でねえ」
「で、いつ来るの？」
「見学の希望日は来週なんだが、知っての通り来週から工場は十日間の盆休みに入る。だから、社員では応対できないんだよ。お父さんもそれに合わせて、クレー射撃協会の出張でイタリアに行ってしまうしな。そこでなんだが、できればおまえにその案内役が頼めないかと思ってな。相手は声の感じからして若い人のようだし、どうだろうか…？」
「そういうことか…」
恵造が、始めて則夫の方に視線を向けた。
普段の恵造なら断っていたかもしれない。だが、その来週の盆休みは、慎一郎が泊まり込みで秘密練習に来ることになっている。辰夫も便乗して遊びに来る。そこに会社の人間に居られては都合が悪かった。三人の楽しみの邪魔をされるくらいなら、その程度のことは仕方がないと恵造は割り切った。
「いいよ。せっかくの休みの日では、ＭＪの社員の皆さんにすまないからね。僕がその人を案内するよ」
恵造は、聞きわけのいい親思いの息子を演じた。
「そうか、引き受けてくれるか。ありがとう、恵造。おまえは本当に成長したなぁ…。よ

し、その代わりにイタリアの土産は奮発してやるからな！」
それを聞いた則夫は、そんな恵造の魂胆も知らずに感激し、大喜びで部屋から出て行った。
恵造は勉強に戻った。目標の大学へ行く為には、まだまだやらなければならないことが山ほどあった。義和は他の受験生の二倍は頑張る必要があった。それまで、ろくに勉強をしてきていなかったからだ。特に、理数系の大学に必要な数学に関しては、まったく基礎ができておらず、結局、小学校の算数からやり直さなければならなかった。英語は中学校に遡って始めた。そんな努力の甲斐もあって、今はなんとか普通の受験生のレベルにまで到達してきていた。
昨年の秋の日立市での決闘以来、恵造は明らかに変わった。辰夫や慎一郎と対峙した時に、そのスケールの大きさに愕然とした。大人と子供ほどの違いを感じた。自分は、井の中の蛙だと痛感した。
しかし、恵造を本質的に変えたのはそのことではなかった。それは、慎一郎の並外れた銃の才能を見た時に、沸き上がったものだった。純粋に、彼の力になってやりたいと思ったのだ。彼の銃のレベルアップの為に、自分の出来うる限りのことをしてやりたいと思ったのだ。その時に、自分の一番やりたいことが見えたような気がした。そして、銃を通して慎一郎と付き合っていくうちに、その気持ちははっきりとしてきた。自分は銃造りの技術を磨きたいのだと思った。それが天職なのだと悟った。
やるからには、基本から徹底的にやろうと思った。その為に、機械工学の基礎を学べる大学の受験を決心したのだ。

十八．申し出

浅尾義和は宿泊先の上野のホテルを出た。
国鉄常磐線に一時間余り乗り、友部駅で下車した。そこからバスに乗り換える。二十分ほどで目的の停車駅に着いた。日本の地方のどこにでもあるような長閑な山間の小さな町だった。バス停では三上恵造が待っていた。
バスから降りて来た義和を見て、恵造は半信半疑で訊ねた。
「あの、もしかして、浅尾さんですか？」
「はい、そうです。ＭＪ社の方ですか？」
「はい。社員ではありませんが、社長の息子の三上恵造です。今回の見学の案内をさせていただきます」
会う相手が想像以上に若かったことから、二人とも一様に驚き合っていた。
「あの、浅尾さんは、お幾つですか？」
「十七歳です」
「え、本当に？ 僕もです」
「じゃあ、高三ですか？」
「はい。三上さんも？」
「うん。若い人が来るとは聞いていたけど、まさか同い年とは…。まあ、とにかく工場に

行きましょう」
二人は、山の方角へ緩い傾斜道を歩き始めた。
「随分重そうなカバンだね。まだ一キロぐらい登り坂を歩くけど、大丈夫かな？」
義和は、いかにも高級そうな大きなボストンバックを持っていた。
「大丈夫です。鍛えていますから」
「何かスポーツをやっているの？」
「クレ…。いや、相撲をちょっと…」
義和はそれを言いそうになり、あわてて言い直した。
「へえ、そうは見えないね。そんなに太ってはいないし…。でも、言われてみるとけっこうがっしりとした体型だよね」
恵造の指摘の通り、義和は身長は並だが体の方はその温和な顔立ちに似合わず、しっかりとした筋肉をしていた。
「だけど、高校生の君が、また何で散弾銃の工場が見たいと思ったの？」
「そうですね。実は、父がクレー射撃をやっているので、それで銃に興味を持って…」
「へぇー、それで九州からわざわざ？」
「はい。ちょうど春から東京の大学に内定しているので、その下調べも兼ねて」
「ええっ、もう入学が決まっているの？」
「はい。学校推薦ですから」
「へぇー、羨ましいなぁ。学校推薦か…。浅尾君は成績優秀なんだね」
「それほどでもないんですが」
「どこの大学なの？」
「学習院です」
「わー、けっこう凄いね」
「三上君も、受験するんですか？」
「まあ、受かるかどうかはわからないけど、一応…」
「希望校はどこですか？」
「まだ、どことまでは決めていないけど、工科系の大学を目指してる」
「工科？」
「うん。機械工学がやりたいんだ」
「それは、東京にあるんですか？」
「うん、二、三校ある」
「じゃあ、もし受かったら、今度は東京で会えますね」
「そうなるといいなぁ」
同い年ということもあって会話が弾み、ＭＪ社の工場にはすぐに着いた。工場の中に案内された義和が不思議そうに訊ねた。
「作業されている方はいないみたいですね？」
「実は、会社は昨日から夏休みに入っていて、従業員は誰もいないんだよ」
「ええっ、そうなんですか…」
それを聞いた義和は、かなり残念そうな顔をした。
「でも、大丈夫だよ。こう見えても、僕は銃に関してはほとんどのことはわかるから。説

明の方は安心して」
「あの…。三上君は、実際に銃をいじったり、部品を調整したりできるのですか？」
「勿論だよ。そんじょそこらの工員よりはずっと筋がいいって、師匠、…あ、いや、工場長に褒められているからね」
「そうなんですか。じゃあ、安心しました」
「それに、誰もいない方がむしろ自由に好きなこともできるし。内緒で、銃にも触らせてあげるよ」
本来ならやってはいけないことなのだが、恵造は九州からわざわざやってきた義和を喜ばせようと思ってサービスのつもりでそう話した。だが、そのあと義和の口から出た言葉は、彼の想像を遥かに超えていた。
「三上君。君のその言葉を信じて、お願いがあります」
「うん、何でも遠慮なく言ってみて」
「じゃあ、とても言いにくいんですが、勇気を出して言ってしまいます」
同い年の恵造が説明役だったと言う幸運が、義和の決断を後押ししていた。
「僕の銃を調整してくれませんか？」
「僕のって？」
「正確に言うと、僕が今使っている父親の散弾銃のことです」
「君が、使っている、散弾銃？」
恵造は、義和の言葉のひとつひとつを確認するように訊き直した。
「はい、そうです」
「だ、だって君は！」
「はい、三上君と同じ十七歳です。勿論、それが違法なのはわかっています。ただ、それは外の世界の話で。僕は、僕の家の敷地の中だけで撃っていますから…」
それを聞いた恵造は、洋画で見るような外国の貴族や大富豪が自宅の敷地でクレー射撃をする風景を頭に思い描いた。しかし、その想像は、外れてはいなかった。
「敷地内って、まさかクレー射撃ができるくらい広いの？」
「はい、充分に」
「ひょっとして、浅尾君の家はとてつもないお金持ちなの？」
「とてつもなくはないでしょうが、そこそこは」
「やっぱり、そうなんだ…」
しばらく、恵造は考え込んだ。
日本は広いと思った。実際にクレー射撃をする高校生は近衛慎一郎だけだと思っていた。だが、もう一人存在した。義和の説明が事実だとすれば、その理由も頷けた。
恵造の視線が、義和の大きすぎるボストンバックに注がれた。
「まさか、その中に？」
「はい、銃が入っています。見ていただけますか？」
「そ、そうだね。せっかくだから…」
義和がボストンバックを開いて、上にかぶせてある衣類をどけると、厚手の布にくるまれた細長い包みが入れられていた。包みを解くと、二つに分解された散弾銃が出てくる。
「ほう…。組み立ててみてくれる？」

恵造が、真剣な眼差しで言った。
「はい」
義和が慣れた手つきで組み立てる。
扱い慣れていることが、その時点で証明された。
「ベレッタか…。触るよ」
「勿論、どおぞ」
恵造はイタリア製のそれを手に取ってみる。
機関部を開けたり、砲身を覗いてみたり、念入りに細部を調べ始める。
「ちょっと、構えてみてくれるかな」
恵造が義和に銃を返して言った。
「はい」
義和が銃を構える。
しばらく、恵造はじっと義和の構えの姿勢を観察していた。
「どうでしょうか？」
「だいたいわかったけど、やっぱり実際に撃っている所を見てみないと正確な判断ができないな。ちょっと、待っていてね」
そういうと、恵造は工場の隅にあるロッカーへ行って、銃ケースを二つ持って戻ってきた。ひとつには銃が入っているが、もうひとつは空だった。
「こっちの空の方のケースに君の銃を入れて、それから、移動しよう」
「はい。で、どこへ移動するんですか？」
「ついてきて。また、一キロほど歩くよ」
行先は言わなかったが、恵造はすでに協力の決断をしていた。

十九．不調の理由

工場から更に一キロほど山へ入っていくと、ＭＪ社の専用射撃場があった。
すでに誰かが撃っているらしく、発砲音が響いていた。
「あれ、誰かが撃っていますね。今日は休みじゃないんですか？」
義和が不思議そうに訊ねた。
「ああ。あれは、僕の知り合いが秘密練習をしているんだ」
「知り合い…ですか」
射撃場に近づくにつれて、義和は撃っている人間がかなりの上級者であると感じとっていた。音だけでわかる。聞こえてくる発砲音は、常に最初の一発のみだ。つまり、さっきからずっとミスショットがないのである。そしてそれは、その男のすぐ後ろに来ても変わらなかった。
「あの知り合いの方は、物凄く上手ですね」
義和は、その男の射撃に圧倒されていた。
その内容は、まちがいなく全日本クラスであった。父に頼んで、大きなクレー射撃の大会を何度も見学していたので、その実力のレベルは正しく判断できているはずだった。

「あの方は始めて見るのですが、どちらの選手ですか？ 大きな方ですね。ひょっとして、外国の選手ですか？」
「ああ、彼は選手じゃない。外国人にも見えるけど、日本人だよ。それに、僕達と同じ高校生だよ」
「ま、まさか、そんな…。嘘でしょう？ ありえませんよ」
その桁外れの銃の腕前からして、そんなことはありえなかった。
それに、がっしりとした大柄なその男の風貌はとても自分と同じ高校生には見えなかった。どう見ても大人のスポーツマンに見える。
「いや、本当だって。本当に高校生だよ」
「そんな…」
義和にはとても信じられなかった。
茫然としたまま、彼はその男の正確無比な射撃に見入っていた。自分以外に、この日本でクレー射撃をする高校生が存在するとは思ってもみなかった。しかも、その射撃の内容は、見れば見るほど、物凄いの一語に尽きた。
三十分ほどたって、射撃の練習がひと段落した。結局、その男はほとんどミスらしいミスを犯さずに射撃を終えた。
クレーの発射のコントロール・ルームであるプーラー室から出て来た工藤辰夫が、先に恵造に声をかけて来た。
「おう、三上。受験勉強は、はかどっているか？」
そう言ってから、隣の義和の存在に気がつき、
「そいつは？」
ほんの少し警戒感を持って恵造に訊ねる。
「大丈夫だ、工藤。浅尾君だよ。九州から、わざわざ工場見学に来たんだ」
「ああ、例の見学の話の人か。聞いていたより若いな。てっきり、おまえの学校の友達かと思ったぜ」
「ははは…、浅尾君は僕達と同じ高三だよ」
恵造が、そう紹介すると、
「浅尾義和です。あの、失礼ですが。今、「僕達と同じ」っておっしゃいましたが。まさか、あなたも同じ高三なんですか？」
と、驚いたように訊ねる。
プーラー室から出て来たので、義和はてっきりこの男こそは社会人だと思っていた。この熊のようなぎょろ目の大男も、どう見ても自分と同じ高校生には見えなかった。
「ああ、そうだよ。工藤って者だ、宜しくな」
辰夫は、自分が高校生に見られないことには、慣れっこになっていた。
そこへ、射撃を終えた男がやってきた。
「調子はどうだ？」
恵造が訊くと、
「まあまあ、ってところだ」
相変わらず普段は喜怒哀楽を現さない物静かさだった。
だが、恵造はもう慣れっこになっていた。表面上はそうでも、本質はむしろ情に厚い男

であった。
「近衛、紹介するよ。浅尾君だ」
恵造が、慎一郎に紹介した。
「始めまして、浅尾です。凄い腕前ですね」
「どうもありがとう。近衛です」
「実は、浅尾君もクレーを撃っているそうなんだ」
恵造がそう言うと、
「ほう、そうなんだ…」という慎一郎の淡白な返答に対し、
「ええっ、そいつは本当か、三上？ 慎ちゃん以外に、まだ高校生の分際でクレーをやる奴がいたとはな！」
辰夫の方は驚きの反応だった。
「それが、君の銃かい？」
慎一郎が、義和の持つケースを見て訊いた。
「はい、そうです」
「何だ、おまえ。九州からそれを持ってきたのか？」
辰夫が、更に驚いたように訊く。
「はい。このケースはさっき三上君から借りたものですが、来る時は大きなボストンバックに隠して持ってきました」
「見せてくれるか？」
「はい」
慎一郎に促されて、義和がケースから自分の銃を取り出した。
「持ってもいいか？」
「はい、どうぞ」
慎一郎は、義和の銃を見始めた。念入りなその動作は、さっきの恵造のそれとよく似ていた。
「イタリアのベレッタだ。型は今の前のタイプだが、なかなかいい銃だよ」
恵造が慎一郎に説明した。
慎一郎はそれに頷きながら、熱心にその銃を観察した。
「分解してみなければ細部までわからないが、基本的にはＭＪのによく似ているな。ただし、部品の素材自体がＭＪより良さそうだ」
機関部の中を覗きながら、慎一郎が呟くように言う。
「ははは…、さすがに痛い所を突いてくるな。その通りだ。だが、正確に言うと、これがＭＪによく似ているのではなく、ＭＪの方がこれに似せたんだがな」
「というと？」
「今のＭＪの銃は、このベレッタを研究して開発したんだよ。だから、悔しいがこっちの方が元祖なんだ」
「なるほど、そういうことか…。そうなると、この銃の中をちゃんと見てみたいな」
「そう言うと思ったよ。あとで、分解するつもりだ」
「その時は、是非立ち合わせてくれ」
「勿論、そのつもりだ」

「やれやれ。この二人が銃談議を始めると、日が暮れちまうぜ。いつもこうなんだ。俺は忘れ去られちまう」
辰夫が、笑いながらオーバーなアクションで義和に嘆いてみせる。
「ははは…。いつも、そうなんですか」
義和は半分同情しつつも、おかしくて笑ってしまった。
「すまん、すまん、辰夫。…ところで、浅尾君。さっそく撃って見せてくれるかな」
そう言って、恵造が義和に銃を返した。
「わかりました」
「辰夫。すまんが、プーラーの方を頼む」
「はい、はい。かしこまりましたよ」
義和が射撃の準備に入り、辰夫はプーラー室に戻った。彼がクレーの発射を操作するのだ。この十ヶ月間、慎一郎の射撃の練習に付き合っていくうちに辰夫の役回りは自然とそうなっていた。
準備の整った義和が射撃台からプーラー室の辰夫の方を見た。辰夫は指でＯＫマークを作って、いつでもどうぞのサインを返す。
義和の射撃が始まった。
クレー射撃競技は、一度に二発まで発砲することが許される。一発目を初矢と言う。初矢で的のクレーを外しても、その次の二発目で仕留めてもいいのである。それを二の矢と呼ぶ。だから、クレー射撃用の散弾銃には、それぞれの発射用に銃身が二本あるのである。
義和の射撃は、最初からその二の矢を使う展開だった。つまり、初矢(一発目)では仕留めきれないのだ。結果は、散々だった。
「い、いつもは、こんなんじゃ…」
打ち終えた義和は、思いがけない結果に動揺を隠せなかった。
「いつもは、二十枚くらいコンスタントに割っているんです！」
クレー射撃は通常、一ラウンドにつき二十五枚のクレーが発射される。つまり、二十五点満点だ。義和は自宅の練習では、ここ最近は常に二十点前後を出していた。だが、この時の結果はわずか九枚だった。
「すみません。もう一回やらせて下さい！」
義和が、哀願する。
「うん、いいよ」
恵造が、辰夫の方に向かって指を一本立てて「もう一回」と口真似をして合図を送った。辰夫から、ＯＫのサインが戻って来る。
再び、義和の射撃が始まった。
はたして、結果は一度目とさほど変わらなかった。割ることができたクレーは、十枚にとどまった。
一回、休憩を入れることになった。
「おかしい。何でなんだ。こんなはずじゃ…」
義和は完全に落ち込んだ。
今にも泣きだしそうだった。
「ははは…、そんなに落ち込まなくても。皆に見られていれば、誰だって始めのうちは緊

張するんだから」
恵造が慰めた。
「おい。これでも飲んで、リラックスしろや。俺のおごりだ」
入口に置いてある自動販売機から買ったチェリオを手渡して、辰夫が笑いかけた。
「ありがとうございます」
義和はそれを一口飲むと、じっと瓶を見つめた。
「何だ、お口に合わなかったか？」
辰夫が怪訝そうに訊く。
「いえ。そうではなくて、その逆です。これ、凄く美味しいですね」
「何だ、おまえ。初めて飲んだのか？」
「はい」
「ひょっとして、九州にはないのか？」
「あるかもしれませんが、僕は初めてです」
「おまえは、本当に生粋のお坊ちゃまだな。チェリオは、他のに比べて同じ値段で量が多いんだ。だから、俺達のような庶民の学生の味方なんだよ」
「なるほど、そうなんですか。とても、美味しいです」
「わははは…。そうか、旨いか。そいつは、良かった」
辰夫は、この自分とはすべてが正反対の義和を気に入ったようだった。
若者達は、脇の芝生の上に車座になった。
しばらく、四人は歓談した。心身ともに大人びている茨城組の三人にとって、年相応に純粋な九州の若者はとても新鮮に映った。そして、彼の話を聞いていくうちに、何とかしてやろうという機運が自然に湧いてきていた。
「さてと…。それじゃあ、さっきの続きをやってみますかね？」
恵造が立ちあがった。
「はい。おかげさまで、今度はリラックスしてできそうです」
「失敗してもいいから。もう、めげるなよ」
そう言って義和の肩をポンとたたくと、辰夫はプーラー室に戻った。
義和の三度目の射撃が始まった。
だが、今度も結果はさほどたいして変わりなかった。割れたのは十一枚だった。
「今度は、緊張せずに撃てたんですが。どうしてでしょうか？」
前回ほど落ち込んではいないが、むしろ事態は深刻であった。
「まだ、射撃場で撃つというスタイルそのものに慣れていないんだろう。三上、おまえはどう思う？」
慎一郎が、恵造に答を求めた。
同じ場所のまま、自分のペースでただ撃つだけの義和の自宅での射撃に比べて、正式な射撃場では一回打つごとに隣りの台に移動するなどの手順やルールがある。その中で、プレイヤーは自分の射撃の間合いやペースを作らなければならないのである。
「うん。理由の一つはそれだと思う。それは、近衛が言うように慣れてしまえばそれで解決だ。本来の射撃に集中できるようになるだろう。だが、原因はそれだけじゃないな」
恵造は、義和の射撃のいくつかの問題点をすでに見つけていたようだった。

「他に何かあるんですか、三上君？　是非、教えてください！」
「うん。おそらく、浅尾君が家で使っているクレーの発射機は一般用だろう。ここのは業務用だ。はっきり言って、その性能は天と地ほど違う」
「そんなに、違うんですか？」
「うん。あとで、プーラー室を覗いてみればわかるよ。業務用の発射機は、クレーの発射の色々な調整ができるんだ。僕達は、それを「設定」と言っている」
「その設定というのは、例えばどんなことですか？」
「クレーを発射する角度や高さ低さ、それから、スピードの速い遅いを調整することだよ。この三つの組み合わせで難易度が決まって来るんだ」
「なるほど。確かに、ぼくの家の発射機とは全然違いますね」
「こう言っちゃ、君には酷だけど。そういう一般用の発射機でいくら高得点を出し続けていても、いざ本物のクレー射撃場では同じようにはいかないということなんだ」
「わかります。どうやら、その通りのようですから…」
　ことを理解できた義和は、理解できた故に深く落ち込んでしまった。
「いやいや、そこまで悲観しなくていいんだ。これも練習で解決していけるものだから。要するに、本物の発射機に慣れて行けばいいんだからさ」
「慣れると言っても、そんなに簡単には…」
「すぐには無理でも、君の力ならできると思うよ。実は、今日の機械の設定は、近衛の腕に合わせて全日本のＳクラスだ。だから、射撃に慣れている上級者だって、そんなに簡単に割れるもんじゃないんだよ。それなのに、始めて撃った君は十枚以上も仕留めたんだから、すでにかなりの腕前ということだよ」
「そうだったんですか。それで、納得できました」
　それを聞いて、義和は少し救われた気がした。
　今になって考えてみれば、発射されたクレーのスピードは普段よりかなり早かったようにも思えたし、飛んで行く角度も厳しいように思えた。射撃の最中は、無我夢中になっていたのでよくわからなかったのだ。
「それと、もうひとつ気がついたことがある」
　恵造が続けた。
「浅尾君の持ってきた銃は、君には合っていないと思う」
「ベレッタが、ですか？」
「うん。ベレッタが、どうのこうのということではないんだ。僕が言っているのは、サイズのことだよ」
　そう言うと、恵造は自分が持ってきた方の銃のケースの方を開けて、中の散弾銃を組み立てた。
「今度は、これで撃ってみて」
　恵造が、それを義和に手渡した。ＭＪ社の銃だ。
「はい、わかりました」
　義和は、手渡された銃を興味津々で見ながら、射撃台に向かった。
「それから、近衛。君は浅尾君のベレッタの方で撃ってみてくれないか？」
　恵造が、義和の持ってきた銃を慎一郎に渡した。

「ありがたい。実は、俺も今、それをおまえに頼もうと思っていたところだ」
慎一郎もそれを望んでいた。
そして、恵造が慎一郎に何を期待しているのかは、慎一郎も薄々感じ取っていた。以前ＭＪ社が手本にしていたイタリア・ベレッタ社の銃と、自分達の造り上げた今のＭＪ社の銃に「違い」があるのかどうかを、彼は撃ち手の慎一郎に判断してもらいたいのだ。
だがこの時、義和が九州から持ち込んだその一挺の銃が、その後の自分の人生を大きく変えるきっかけになるということまでは、さすがの慎一郎も考え及ばなかった。
義和に続いて、慎一郎も射撃台へ向かった。

二十．小さな嘘

真夏の午後―。
茨城県西茨城郡友部町の山間部にあるＭＪ社の射撃場では、若者達による射撃が再開されようとしていた。今度は、義和と慎一郎の二人が一緒に並んで射撃台に入った。プーラー室の辰夫と合図を交換し、射撃が始まった。
慎一郎は、相変わらずほとんど外すことはなかった。義和の方も初めて使う銃の割には、先の三回よりもいいペースで撃っているようだった。
三十分後、結論が出た。慎一郎は二十五枚中、二十四枚だった。外したのは最初の一枚だけだ。
そして、注目の義和は十八枚だった。
「やはり、良くなったな」
義和の好結果は、恵造の予想通りだった。
「三上君。これっ！」
顔を紅潮させた義和が、恵造の方に振り返って叫んだ。
射撃の結果は普段の自分の平均枚数には及ばないものの、義和はとても嬉しそうだった。割った枚数以上に、彼はある満足感を得ていたのだ。
「ははは…。撃ち易かったでしょう？」
恵造が、ニコニコしながら義和に訊いた。
「はい、とても。とても撃ち易かったです！」
義和の興奮は冷めやらない。
「おい。今の浅尾の点数は、まあまあじゃねえか？」
プーラー室から出て来た辰夫が嬉しそうに恵造に訊いた。
「うん。睨んだ通りだ」
恵造には、その結果に確信があるようだった。
「でも、始めて使う銃なのに、何でこんなに？」
義和は早くその理由が知りたかった。
「結論から先に言うと、君が普段使っている銃よりも、その銃の方が君に合っているということだよ」
「どんなところがでしょうか？」

「具体的に言うと、この銃の銃床部の長さや形が君の体型に合っていたんだ」
「銃床部の…？」
義和は、手にした銃の肩にあてる木製の部分をまじまじと見る。
「うん。もっと詳しく言うと、君の体型は君が普段使っているイタリア製の銃に比べて懐が浅すぎるんだ」
「懐が？」
「そう。銃床を抱える肩や、胸や、両腕の部分の余裕のことだ。もともと君の銃は、欧米人が欧米人の為に作ったものだ。だから、機関部以外の寸法は欧米人の体格に合わせてあるということだ」
「そうか。俺や慎ちゃんのようにデカイ奴はともかく、浅尾の体型は日本人の標準だ。となると、どうしてもイタリア製の銃では大き過ぎて、しっくりこないってわけだ」
辰夫が説明に参加した。そして、その説明は満点だった。
それに恵造が、具体的な補足をする。
「そう言うことだ。しっくりきていなかったんだ。体が大きく、手足が長い、つまり懐の深い欧米人用の銃床では、浅尾君には大きすぎていたんだ。そうとは知らない今までの君は、それを無理矢理に抑え込んで何とか凌いでいたのだと思う。だが、その状態だと正しいスイングができないし、早いスピードのクレーには対処できなくなってしまうんだ。自宅でやるような一般レベルの設定ではそれで対応できていたんだろうが、本格的な射撃場の設定になると…」
「それでさっきまでは、ここの早くて厳しいクレーの設定にまったく対応できなかったんですね？」
義和が、何度も大きく頷いて言った。
目から鱗が落ちるとは、まさにこのことだった。
「そうなんだよ。本来の君はクレーの狙いもいいし、スイングの腰の使い方も正しい。ただ、使っている銃が君と一体になっていなかった為に、ズレが生じてしまったんだ」
「僕と一体になっていなかった」
「そう。正しい銃とは、射撃手の体と一体化していなければならないんだよ。それで始めて射撃手の本来の力が発揮できるんだ」
恵造が、それをきっぱりと言い切った。
それこそ、銃造りを生業にしようとする男の力強い言葉だった。
「わはははは…、三上。今日のおまえは、ばかに格好いいぞ！」
辰夫が、珍しく恵造を褒めた。
恵造は更に説明を続けた。
「僕が持ってきたその銃は、君のベレッタよりも銃床がひと回り小さく、短く造ってあるタイプだよ。しかも、少し軽くできている。だから、とても撃ち易かったはずだ。前よりもずっと良い射撃の対応ができたはずだよ。当然、割れる枚数は一気に増えたというわけだ」
「そうだったんですか。それで、あんなに…。でも、あらかじめそれを用意してきたということは、ひょっとして三上君は、この射撃場に来る前から僕のその欠点を見抜いていたんですか？」

「うん、わかっていた。工場で君に君の銃を構えてみてもらった時にそう推測できた。で、実際にここで撃ってもらって、それを確信したんだ」
「三上君。す、凄いです！」
義和の目から、更に大量の鱗が落ちていた。
「相変わらず、鋭い奴だ」
さすがの慎一郎も、この時ばかりはこの同い年の若き銃職人に脱帽した。
「じゃあ、浅尾君。あとで工場に戻ったら、さっそく銃床を君に丁度いい長さに調整しよう。おそらく、そうするだけでかなり撃ち易くなるはずだ」
「ありがとうございます！」
「わはははは…。よかったな、浅尾。九州からわざわざ来た甲斐があったってもんだ」
「はい、本当に！」
辰夫と義和が笑顔を交わした。
「よし。お祝いに、チェリオをもう一本ごちそうしてやろう。ついて来い！」
「はい！」
二人は、古くからの親しい先輩と後輩のように、入り口の自販機の方へ向かった。
「ははは…。どうやら浅尾君は、辰夫に気に入られたようだな」
「そのようだな。…だけど、どう見てもあれじゃ、まるで子分だな。ははは…」
慎一郎と恵造は、その光景を笑顔で見ていた。
「ところで、近衛。ベレッタの方はどうだった？」
恵造が訊ねた。
「いい銃だ。バランスがいいな」
慎一郎は、事も無げにさらりと答えた。
それを聞いた恵造は、あの諺を思い出した。弘法筆を選ばず、だ。皆、浅尾義和の得点にばかり気が行っていたので忘れられがちだが、同じ時、慎一郎は驚くべき結果を残していた。彼は生まれて初めて手にした銃で、ほとんどミスのない射撃をしていたのだ。やはり慎一郎は、田代幸吉が言う「会話をする能力」の持ち主なのだろうと、この時恵造は確信した。
「そうか…。で、うちの銃と比べてどうだ？ 遠慮なく言ってくれ」
それこそ、恵造が個人的に一番訊きたかったことだった。
「安心しろ、ほとんど変わりがない」
「そうか。その言葉が聞きたかった」
恵造が安堵した。
慎一郎は再びベレッタを手にすると、その場を離れてひとりベンチへ向かった。
ベンチに座ると、その銃をじっと見つめる。
態度にこそ現わさないが、彼は複雑な心境だった。生まれて初めて撃ったこのイタリア製の銃が原因だった。
慎一郎は、恵造に小さな嘘をついていた。親友を気遣って「ほとんど変わりない」と、返答した。だが、それは裏を返せば、わずかに差があるということである。そして、そのわずかな差こそが、クレー射撃の世界においては、時に決定的な差になりうるのである。
慎一郎はそれに気づいてしまっていた。

義和から借りたこのイタリア製の銃は、発射時の銃のブレがＭＪ社のものよりもわずかに少なかった。銃身の跳ね上がりが小さかった。上にだけでなく、後方へのショックの吸収も優れていた。それが銃床の造りの良さなのか、引き金の松葉バネの切れの良さなのかまでは慎一郎にはわからない。だが、このわずかな差こそが、銃造りにおける欧米と日本の百年の差に相当するのかもしれないと彼は感じていた。

ＭＪ社の工場長である田代幸吉は、誰もが認める日本を代表する銃職人である。その弟子である恵造も、その面での資質は並外れている。今日の浅尾義和に対する彼の一連の対処を見ても、それは実証されている。だが、二人共所詮は造る側の人間である。自分達が造る銃の出来が本当に良いものであるのかどうかという最終的な判断の部分に関しては、残念ながら限界がある。想像の域を出られないのだ。理論と実践には微妙に差があるからだ。最終的には、それは撃ち手の意見に委ねられることになる。その銃の良し悪しを判断するのは、結局は撃ち手の方なのである。

つまり、いい銃を造るには優れた造り手と、優れた撃ち手の両方が必要なのだ。その「わずかな差」に気づくことができる撃ち手のアドバイスが欠かせないのである。慎一郎は、そのわずかな差を感じ取ることができていた。

おそらく、今まで日本にはそれを感じ取ることができる撃ち手は存在しなかったのかもしれない。だから国産の銃は、欧米の銃を越えることができないでいたのだろう。

そして、慎一郎はその能力を活かすことが、自分のやるべきことだと感じ始めていた。自分自身の銃を撃つ技術の向上と共に、銃そのものの技術の向上の為に力を貸してやらなければならないと思った。それが、自分にここまでしてくれた三上恵造への恩返しだとも思った。

「近衛さん」

チェリオを手に戻ってきた義和が、慎一郎に声をかけた。

だが、そぐそばのベンチに座る彼には届いていないようだった。彼は依然としてベレッタを見つめたまま、じっと動かないでいる。

「近衛さ…」

義和が改めてもう一度声をかけようとした時、恵造に止められた。

恵造は右手の人差し指を自分の口元に当てて、無言のまま首を横に振った。

「あ、はい…」

それを察して、義和が小さく頷いた。

今、あわててしなければならない話ではなかった。義和は、慎一郎に感謝の言葉を伝えたかっただけだった。

興奮から醒めて平常心に戻った義和は、改めて慎一郎の射撃の凄さを思い知ったからだ。クレー射撃のキャリアは自分とほとんど変わらない。むしろ、実際に撃った回数は義和の方が圧倒的に多かったはずだ。だが、慎一郎のそれは自分など足元にも及ばないほどのレベルの高さだった。しかも、そのレベルは使用する銃に左右されない程の揺るぎないものであった。それと比べると、射撃が行き詰った時に、それを銃のせいにしようとした自分があまりにも恥ずかしかった。

義和は純粋に感激していた。九州から意を決してここまで来て良かったと、心から思った。恵造と出会い、自分の欠点を指摘してもらえたこと。自分の使う銃に対する明確な答

えを出してもらえたこと。それは、言うまでもなく予想以上の大きな収穫だった。だが、それ以上に近衛慎一郎という比類なき撃ち手に出会えたことが、何よりも嬉しかったのだ。まちがいなく彼こそは、今後の自分の目標になる人物だった。

三上恵造は、ベンチに座ったまま物思いにふける慎一郎を黙って見つめていた。

彼は、今の慎一郎が何について思いを馳せているのかまではわからなかった。だが、おそらくそれはかなり大事なことであり、今は声をかけずにいてやることが良いのだということだけは理解できていた。

その配慮の気持ちは、工藤辰夫も同じであった。彼は意識して三人から少し距離を置き、残りのチェリオをゴクリと飲み干した。

二十一・進路

近衛慎作の葬儀は、滞りなく終了した。

市内で観光業とレジャー業を営んでいたとはいえ、それを差し引いても余りある盛大な葬儀だった。それは、ひとえに工藤健吉の仕切りのおかげだった。

くも膜下出血で急死した慎作だったが、その後の健吉の段取りは素早かった。会場の寺に置かれた献花には、市長を始め地元の名士の名前がずらりと並んだ。実際に、役所からは市長の秘書や観光課長が弔問に顔を出した。商工会議所や地元の警察署長までもが足を運んで来ていた。

葬儀のあと片づけで、境内中を工藤一家の若い衆がてきぱきと動き回っている。本堂の脇の建物の二階にある親族用の部屋では、喪主である慎一郎や菊枝と一緒に工藤親子と三上恵造が慎作を偲んでいた。

「親分さんには、こんなに立派な葬儀を出していただいて、慎作もきっと喜んでいます」

菊枝が、改めて礼を言う。

「なあに、これしきのこと。七年程度と付き合いの時間は短かったが、慎作は実の弟のように可愛かったんだ。それに、あいつには商才があった。これから、もっともっとこの町の発展の為に貢献できた男だ。それだけに残念で仕方がねえ」

健吉が、しみじみと言った。

「うん。本当に親父は、慎作さんを頼りにしていた。他の子分衆が焼きもちを焼くほどだったよな」

辰夫が続く。

「辰夫ちゃん、ありがとう」

「で、菊枝さんよ。こんな時に何だが、あいつがやっていた会社や店の方はどうする？」

「まだ、急なもので、そこまでは…」

「まあ、当然だわな。あまりにも急だったからな」

「ええ。どうしていいものやら…」

「慎一郎は、何か考えがあるのか？」

健吉は慎一郎に何か希望があれば、ひと肌脱ぐつもりでいた。

「ないです。自分がこれからやろうとすることで精一杯で、親父の仕事のことまでは…」

「ほう。何かやりたいことでもあるのかい？」
「はい、あります」
と言いきった慎一郎のきっぱりとした返答に、
「え、ちょっと待ってよ。慎ちゃんは高校を卒業したら、慎作さんの会社を継ぐつもりじゃなかったのか？」
辰夫が驚いた。
大学受験の準備もしていないようだし、他にやりたいことがあることなど一度も聞いていなかった。
「ああ。もとから、親父の会社を継ぐ気はなかった」
「おい、慎ちゃん。やりたいことがあるなんて、そんな話は今始めて聞いたぞ。何で、この俺に言ってくれなかったんだ」
辰夫は、驚きと不平を織り交ぜたような表情で言った。
「三上は知っているのか？」
「いや、俺も今始めて聞いた」
恵造にも心当たりがなかった。
「すまん、二人とも。隠すつもりはなかった。実は、やりたいことができたのはつい最近なんだ」
「そ、そうか。それなら仕方ないな…。で、いったい何がやりたくなったんだ？」
「それは、また今度の機会に話す。親父がこうなった以上、今は改めて考えをまとめなければならん」
「そうだな。そうなるな。でも…」
辰夫が、続きを話そうとした時、襖の向こう側から大きな声がかかった。
「親分、すみません！」
若頭の兼光の声だった。
「何だ、今大事な話の最中だ。後にしろ！」
「わかっていますが、至急の要件です」
「何なんだ？」
「すみませんが、こちらの方へ」
ふすまから顔を出した兼光は、申し訳なさそうに健吉に頼んだ。
部屋の中の四人に会釈する彼の顔はぎこちなく強張っていた。
「仕方がないな…。じゃあ、ちょっとごめんなさいよ」
健吉も、ただ事ではないことを察して部屋を出た。
二人は廊下で何やら立ち話を始めた。
しばらくすると、健吉が部屋に戻った。
「菊枝さん。申し訳ないが急用ができたので、今日はこれでお暇する」
笑顔を浮かべて取り繕ってはいるが、その顔はやはりさっきの兼光と同じようにぎこちなく見えた。
「はい。このたびは何から何までやっていただいて、本当にありがとうございました」
「とんでもねえ。菊枝さんも、体には気を付けて下さいな。…それから、慎一郎。そういうことで今日は帰るが、おまえの今後のことも含めて近々に話を聞かせてくれ。慎作がこ

うなった以上、わしがおまえの親代わりだ」
「はい。感謝しています」
「じゃあな」
襖が閉まった。
板の間の廊下を歩き去る二人の足音は、緊急さを物語るように大きく早かった。
その音が聞こえなくなると、慎一郎と辰夫が顔を見合わせた。
「辰夫。親父さん、何があったんだろう？」
「わからん…。昨日今日は、すべての予定をキャンセルして、慎ちゃん達のことを最優先するって言っていたから…。よほどのことが起きたんだろうな」
「ちょっと気になるな」
「ああ…。親父のあの慌てぶりは、尋常じゃねえ」
「すまんが、若い衆かなんかにそっと聞いて来てくれないか？」
「わかった。俺も知りたいし」
後追うように、辰夫が部屋を出た。
廊下を急ぐドカドカという足音が響き渡った。
「それじゃ、慎ちゃん。私も家に戻って、早めに休むとするわ」
菊枝が、荷物をまとめた。
「うん。ゆっくり休んで。俺達は辰夫と話があるから」
まだ昼時だが、年配の菊枝は連日の弔事の疲れが出ているようだった。
「三上さん。二日間もそばにいてくれて、ありがとう。じゃ、お先にね」
「はい、叔母さん。また」
地元民でない恵造は、大津港まで遊びに来ると慎一郎の家に泊っていくことが多かったので、菊枝とも親しかった。
菊枝が部屋を出て、慎一郎と恵造が残った。
「菊枝叔母さんも、しばらくはいろいろと大変だろうな」
「ああ。体を壊さなけりゃいいんだけど」
「そうだな」
一息ついて、恵造が口を開いた。
「ところで、近衛。よかったら、さっき言っていたそのやりたいってこと、今教えてもらえないか？」
恵造にとって、親友の進路は関心がないはずがなかった。
「うん。実は、おまえに一番始めに聞いてもらいたかったんだよ。ちょうどいい機会だから、話しておく」
「辰夫じゃなくて、俺に？」
「ああ、そうだ。おまえにだ」
「そいつは光栄だな。…で、何だ？」
慎一郎が、恵造の顔を真っすぐに見据えて言った。
「ズバリ言う。俺は、イタリアへ行きたいと思っている」
「イタリア、か…」
それを聞いたのが辰夫なら、天地がひっくりかえるような騒ぎ方で驚いただろう。だが、

恵造は違った。世の中で恵造だけは、その国の名前を慎一郎から聞いても、驚かずに自然に受け入れることができた。イタリアは、銃造りとクレー射撃の本場だからである。
「銃の為なんだな？」
念の為に、恵造が訊いた。
「ああ、勿論そうだ」
慎一郎が、きっぱりと返した。
慎一郎がそれを考え始めたのは、以前友部町のＭＪ社を九州の浅尾義和が訪れた時からだった。彼のイタリア製の銃を初めて手にした時に、国産の銃との違いに強い衝撃を受けたからだ。
「具体的にどうするかは、考えているのか？」
「今、いろいろと調べているんだが、できれば学校と銃工房の両方に行って勉強がしたい。ちょうどいい制度があるにはあるんだが…」
イタリアにも、働きながら大学に通う留学生を受け入れる制度があった。ただ、それには相応の推薦人が必要であった。
「だったら、親父に相談してみようか。ここ最近はクレー射撃協会の理事になって、銃の本場のイタリア関係にもいろいろとコネを持っているようだし」
「そうか、ありがたい。実は、それをおまえに相談しようと思っていたんだ」
「なるほど、そうだったのか…」
恵造は、慎一郎の話を不思議なくらい自然に受け止めていた。
そして、それを予感さえしていたような気がしていた。近衛慎一郎は、今、自分の人生の大きな舵を切ろうとしている。そして、それは必然であると感じられた。

二十二．出入りの相手

その時、ドカドカと廊下を早歩きする足音が聞こえて来た。
早歩きと言うよりは、走ると言った方が近かった。重量感のあるその足音の主は想像通り、辰夫だった。勢いよく襖を開けて入って来る。
「慎ちゃん、大変だっ！」
「何だったんだ？」
「出入りだよ！」
「出入り…。相手は？」
「小名浜の鏑木組の奴らだ！」
「何っ。あの鏑木吾朗の組か？」
思わず、慎一郎が訊いた。
何年かぶりに聞く名だった。
「そうだ。慎ちゃん、よく知っているな？」
「ああ。昔、ちょっとあってな…」
慎作の葬式の日にその名前を聞くとは、なんという因果であろうか。
「それはともかく、その出入りの件を詳しく教えてくれ」

「ああ。きのうの夜のことだ…。まだ、八時くらいだったんだが、駅前にあるスナックで暴れた客がいたんだ。ママさんの通報を受けて、うちの組のある若い者がその店に駆けつけたんだが…。そいつはまずいことに、その客と一戦交えちまったんだ。相手をこてんぱんにしたそうだ」

「何故、まずいことなんだ。悪いのは客の方だろう？」

恵造が、不思議そうに訊いた。

「地元民じゃないからおまえは知らないだろうが、どんな場合でもこちら側は手を出してはいけないというのが、親父の日頃の教えなんだ。相手がどんなに暴れても、一応客は客だからな。手を出さずにせいぜい威嚇どまりですませる。仮に相手がかかってきた場合でも、挑発に乗らずに相手に殴らせろというのがうちの組の規律なんだ。観光でも成り立っているこの町にとって、野蛮な「揉め事」はイメージダウンにつながってしまうからな。そういう親父のやり方が、役場や地元民達から支持されている理由なんだよ。だから警察ですら、うちに感謝しているんだ」

「そうか。だとすれば、その若い者は組の規律違反ということになるな」

「ああ、そういうことになるんだが…。実は、そいつはまだその規律の意味をよく理解していない入りたての半人前の奴だったんだ。運悪く、昨夜はそいつがたまたま一人きりで電話番をしていたんだ。ほら、組の衆は全員この寺の通夜の手伝いに駆り出されていたからさ…。で、そいつは組に認めてもらいたい一心で、はりきっちまったってわけさ」

「なるほど。で、そのこてんぱんにやられた客が、その鏑木吾朗って奴の所に泣きついたってわけか」

ことの背景を理解した恵造が、結んだ。

「うん、その通りだ。悪いことに、隣町の鏑木は前々からうちの縄張りを狙っていたんだ。実際、今までに何度かちょっかいを出してきていた。だが、うちはずっとその挑発に乗らないで来たんだ。親父が組の衆に厳しく規律を守らせているのは、そのことも理由の一つなんだ」

「そうだな。こちらから手を出さない限りは、相手も手を出す大義名分がつかないからな」

「ああ、そうだ。しかも、こっちは警察を味方につけているからな。よほどの口実がない限りは、下手に手を出せないのさ」

「ところが、今回その口実を与えちまったってわけか」

「うん、そうなんだ。ひょっとしたら今回の一件も、もともと奴らが仕組んだのかもしれん。いや、間違いなくそうだ。すぐに、落とし前をつけるという連絡が入ったからな。奴らの筋書き通りなのかもしれない…」

辰夫が、苦々しい顔で答えた。

「で、これからどんな動きになるんだ？」

恵造が、訊ねた。

「小名浜の知り合いの情報だと、鏑木の事務所の前に目つきの悪い威勢のいいのが何人か集まって来ているようだ。それに、空のダンプも横付けされているそうだ。いかにも、待っていましたというばかりにな…」

「そうなると、今夜ってこともありうるのか？」

「今夜だろう。まず間違いないと思う」

「何で、そう言い切れるんだ？」
「親父は味方が多い。時間を置いてしまえば、親しい警察関係や、他の組の親分衆が仲介に動いてしまうからさ。そうなってしまう前に叩きに来るはずだ」
この手の話になると、辰夫の説明には反論の余地のない説得力があった。
「なるほど、そういうことか…」
しばらく、三人は黙り込んだ。
慎一郎は席を立つと、窓を開けて外の景色を見た。高台にある寺のその建物からは、大津の港が視界の右側に見下ろせた。中央には灯台や六角堂のある岬が見える。そこから海岸線に沿って視線を左側に移していくと、福島県の小名浜まで続いていく。
鏑木吾朗の牙城だ。
その景色を凝視しながら慎一郎は、微動だにせずじっと何かを考え込んでいた。
「どうした、慎ちゃん？」
辰夫が、慎一郎に声をかけた。
だが、彼には届いていないようだった。彼は依然として立ち尽くしたまま、じっと動かないでいる。
「慎…」辰夫が改めてもう一度声をかけようとした時、恵造に止められた。
恵造は人差し指を自分の口元に当てて、無言のまま首を横に振った。
「う、うん…」
それを察して、辰夫が小さく頷いた。
五分ほどして、慎一郎がやっと動いた。
「辰夫。俺は、参加させてもらうぞ。親分の力になりたい」
振り向いた彼の口から発せられた言葉は、意外なものであった。
「ええっ。駄目だよ、慎ちゃん。気持ちは嬉しいが、出入りに加わるのだけは駄目だ。それだけは親父も絶対に許さないぞ！」
辰夫が焦って言った。
「いや、そこまではしない。俺なりに、何ができるのかを考えたんだ」
「そうか。それならいいんだが…。で、ひょっとして、何かあいつらをやっつけるいい作戦が浮かんだのか？」
「ああ、大まかにだが…。でも、攻めるんじゃない。時間がないのでそこまではできない。だが、守ることならできるかもしれない」
「守ること？」
「うん。実際、どこまで力になれるのかはわからんが、とにかくできる限りの準備だけはしておきたいんだ」
「備えあれば憂いなし、だね」
恵造が、得意気に言った。
受験勉強で覚えた諺だった。三人の中で唯一大学受験をする恵造は、ラストスパートに入っていた。
「そう言えば、三上には親父の葬式のことで、大切な受験勉強の時間を二日も潰させてしまったな」
慎一郎がそれを詫びた。

「いいって、気にするな。すでに目標校は合格圏内に入っている。ところで、俺の役回りはちゃんとあるんだろうな？」
「そう言ってもらえると頼みやすい。実は、あるんだ」
「言ってみてくれ」
恵造が、身を乗り出した。
「俺の今の銃で、スラッグ弾を撃てるようにできるか？」
慎一郎の口から出た依頼は、余りにも予想外の内容だった。
スラッグ弾とは、狩猟で大型動物を相手にする時に使用する弾のことであった。
「スラッグ？　相手は人間だろう？」
一瞬、何故なんだ、という顔をした恵造だったが、慎一郎の真剣な眼差しを見てすぐに考えを改めた。
「ひょっとして、それは今回の作戦に関係があるのか？」
「勿論そうだ。で、どうなんだ？」
「ああ、できるよ。外付けの絞りを銃身にはめ込んでやればＯＫだ…」
「それは、この近くで手に入れられるか？」
「この近辺の銃砲店だと、日立だな。万が一そこに置いてなくても、水戸まで行けば大丈夫だと思う」
「そうか。すまんが、急いで行ってきてくれ。スラッグ弾を一ケース頼む」
「わかった。今からバイクでろっこく(六国＝国道六号線)を往復しても、明るいうちには戻って来れるよ」
「よろしく頼む」
「おい、慎ちゃん。俺は何をすればいい？」
辰夫も、身を乗り出して訊いてくる。
「俺と一緒に下見に来てくれ。その前に、誰か一人協力してくれる奴をよこしてくれ。できれば、野球部の桐島がいい。あいつには、日立の時の貸しがあるからな。それに、そこそこの度胸もあるしな」
慎一郎は、日立の決闘での彼のことを思い返して言った。
「それと、他に急いで揃えて欲しいものがある」
「おう、何だ？」
「確か健吉親分の会社は、道路工事もやっていたよな？」
「ああ、やっているぜ」
「あとで、その倉庫に連れて行ってくれ。手に入れたいものがある」
「勿論いいけど、それが何なんだ？」
「今から、まとめて話す」
「よし、わかった。まかせておけ。わはははは…、何だか、ワクワクしてきたぞ！」
本来なら父親の大ピンチであるのにもかかわらず、すでに辰夫の気持ちは、久しぶりに慎一郎と組んで戦うことの楽しみの方に切り替わっていた。
「慎ちゃん。早くその作戦を聞かせてくれ！」
「わかった。二人とも、ちょっとこっちへ来てくれ」
そう言って慎一郎は、さっきまでいた窓際に二人を招いた。

「あの辺りが、鏑木の奴らがいる小名浜だ…」
言いながら、人差し指で海岸線をなぞっていく。
そして、指はある一点で止まった。
「そして、あそこが俺達の防衛線だ」
慎一郎は、自分のプランをざっと二人に話し始めた。

二十三．選ばれた道

夕刻。大津警察署―。
工藤健吉がらみの葬儀に顔を出し、警察署に戻って来た署長の阿部重松は、この日も平穏無事な一日を終えようとしていた。今日の主だった業務はすべて完了していた。
その電話がかかって来たのは、定時報告を終えて今朝の新聞の読み残しを読みかけた時だった。小名浜の鈴木と名乗る男からの自分宛の外線が入ってきた。心当たりはないが、とりあえず阿部は取りつがせた。
「はい。私が、署長の阿部ですが。そちら様は？」
話を聞いてみると鈴木というのは仮の名で、それはいわゆるタレ込み電話だった。
今夜、小名浜の鏑木組の連中が大挙して大津港に殴り込みをかけてくるという内容だった。にわかには信じがたい話だったが、落ち着いた相手の話しぶりには真実味も感じられた。電話が切れると、阿部は念のために小名浜署の署長の渡井に確認の連絡を入れてみた。渡井とは、県警同士の情報交換会で旧知の仲であった。署員に調べさせてみるとの返答をもらってから、一時間もしないうちに渡井からその返事が返ってきた。確かに、鏑木組にその動きがあるとのことだった。阿部は慌てて、大津署の全署員に集合をかけた。
夜―。
慎一郎と恵造は木立の中に身を潜めていた。
海沿いを通る県道を見下ろせる暗い林の中だった。
二人は一時間ほど前に、小名浜の鏑木組の事務所からキャデラックと荷台に十数人の男を乗せたダンプが出るのを見届けると、バイクに乗ってここに来ていた。
事務所を出た鏑木達の車列は、そのまま国道に入った。だが、慎一郎達は国道には向かわず、わざわざ不便な海沿いの狭い一車線の県道を使ってここまで来ていた。計画通りなら、鏑木達は途中までしか国道を使えなくなる。そして、結局は迂回してこの道を使わざるを得なくなるからだ。
それは、慎一郎の作戦だった。事前に野球部の桐島を使って、地元の警察署長のところへ密告電話をかけさせてあった。今夜、福島県側から鏑木組が大勢で国道を使って押しかけて来るとの内容だった。慌てた警察署長は、国道の茨城県側の入口に緊急の検問を設けたのだ。
そこで、鏑木達があきらめて引き返すのならそれも良し。それでも、あきらめずに大津港に来ようとするのであれば、それも良しだ。彼らは検問の手前から迂回してこの海沿いの県道を使うことになり、計画通り慎一郎達が迎え撃つまでだった。その結果がどちらかになるのかは、天に任せた。

数分後、その結果が出た。
はたして、鏑木達は後者の方を選んできた。
それは、国道でそれを確認してここに戻ってきた辰夫のバイクのライトの点滅によって慎一郎達に知らされた。慎一郎の望むところであった。辰夫と同乗していた桐島は、あらかじめ道路の脇に隠しておいた通行禁止のバリケードと黄色いランプの警告灯を道路上に二つ並べると、急いでその場を引き揚げた。それは、工藤一家系列の道路会社の倉庫から拝借してきたものだ。バリケードが置かれたのは、丁度、県境を知らせる道路案内板の真横だった。
「あいつら、もうすぐ来るぞ！」
道端の木陰にバイクを隠して、辰夫と桐島が息を切らせて慎一郎達のもとへ上ってきた。
「ご苦労さん。あとはまかせておけ」
慎一郎が辰夫達の労をねぎらうと、恵造に命じた。
「三上、例のボールを桐島に渡してくれ」
「ああ、わかった」
そう言って恵造が、段ボール箱に入った大量の野球のボール大の新聞紙の球を桐島に見せた。慎一郎が急遽用意したものであった。ビニールテープで十文字にとめてあり、中には丸められた爆竹と直径三、四センチくらいの大きさの石が詰め込まれていた。爆竹の導火線だけは外に出してある。
「感触はどうだ、桐島。だいたい野球のボールと同じくらいの大きさと重さにしたつもりだが？」
慎一郎の説明を聞いた桐島は、そのうちのひとつを手にして、手のひらの上で軽く前後に転がしてみた。
「うん。ちょうどいい重さだ。これなら、いけるよ」
「よし。頼んだぞ、桐島！」
辰夫が、桐島の背中を叩いて鼓舞した。
「まかせておけ！」
そう言って、桐島が投球練習の時にやるように腕をぐるぐる回した。
慎一郎は、木立の中でゆっくりと射撃の姿勢に入った。普段とは違って、銃の先端には金属製の部品が装着されていた。恵造が日立市の銃砲店へ行って持ってきてくれた「チョーク＝絞り」と呼ばれる部品だった。
散弾銃は他の銃と違って、色々な種類の弾が撃てるのが特徴だ。通常の弾は、薬きょうの中に何百という小さな鉛の粒が仕込まれており、これが放射状に拡散して、小さくて早い動きの獲物を捕らえる仕組みだ。それが、散弾銃と言われる所以である。そして、その鉛の粒の大きさや数は、狙う獲物の大きさによって選択が変わってくるのだ。当然、殺傷能力はその鉛の粒が大きければ大きいほど高い。従って、動きが早くて小さい鳥類や小動物には粒が小さくて数が多い散弾を使い、逆に中型以上の動物には粒が大きいものを使うことになる。その中で最も強力なものが、スラッグ弾(＝一粒弾)である。
これは、熊やイノシシのような大型動物が相手の時に使用されるもので、薬きょうの中の鉛弾はひとつしか入っていない。その威力もさることながら、通常の散弾よりも有効射程距離が長いのも特徴だった。その射程はライフルまではいかなくても、優に百メートル

は超える。クレー射撃用の通常の散弾の二倍の長さの距離を撃つことが可能であった。そして、今回銃身に装着されたチョークは、このスラッグ弾を撃つ為のものであった。

二十四．吾郎の苛立ち

鏑木吾朗は苛立っていた。

予想外の国道での検問によって、完全に出鼻を挫かれてしまったからだ。コースを変えて襲撃相手の所へ向かってはいるが、組員達の士気は完全に落ちてしまっていた。事務所を出た時の勢いは影もなくなっていた。組員達は、一様に警察が介入したことを恐れていた。相手の工藤健吉は人格者であり、工藤一家は地元の警察と懇意であることを皆はよく知っていた。そこにきての、あの検問であった。そのことは、吾朗自身もよくわかっていた。

車が急停車した。

「どうした。今度は何なんだ！」

後部座席から吾朗が荒げた声で運転手に訊く。

「通行止めの看板ですわ」

「何だと。また、警察か？」

一瞬、吾郎の顔に緊張が走った。

「いや、大丈夫のようです。警察の検問じゃありません。普通の工事かなんかのでしょう」

「そうか、よかった…。通れるかどうか、見てこい」

「へい」

車内の護衛の二人が車を降りて、看板の所へ向かう。

後ろに停まるダンプの男達は、不安そうにざわめいている。

「ちっ、臆病者どもが！」

その様子を見て、吾郎が舌打ちをした。

「まったく、しょうがねえな！」

結局、彼も車を出た。

本当に警察がらみでないのかを、やはり自分の目で確かめる必要があった。

その時、道路わきの崖の上に陣取る慎一郎は、双眼鏡でその男の顔をはっきりと確認した。忘れもしない、右の頬に大きな傷を持つ男。七年前に父の慎作を蹂躙し、小名浜から追い出した男だ。間違いなく、鏑木吾朗本人だった。

「よし、今だ。投げろ！」

慎一郎の号令で、恵造が持っていた爆竹の導火線に火を付け、桐島に手渡す。

桐島は遠投なら任せろとばかりに、それを眼下の道路に向かって投げた。

それは見事に六十メートル先のキャデラックとその後ろに停まるダンプの足元に落下し、すぐにパンパンとけたたましく大きな音で破裂し始めた。

「な、何だっ！」

鏑木達にパニックが始まった。

「どんどん投げろ！」

と、命じながら、慎一郎が狙いを定めた。恵造と辰夫が爆竹のボールに火をつけてはそれを桐島に素早く手渡し、桐島が投げるという動作が、最短のサイクルで繰り返される。暗がりの道路上では、けたたましい破裂音が切れ目なく続く。

爆竹の音に混じって、パーンという発射音がした。その途端にキャデラックの大きな車体が、ガクンと右に傾いた。慎一郎の放ったスラッグ弾は、キャデラックの後輪を撃ち抜いていた。

「わー、組長の車がやられたぞっ！」

後ろのダンプの連中が叫ぶ。

どんどん投げ込まれる猛烈な爆竹音の中、パーンと二発目が放たれる。今度は、ダンプの車体がガクンと傾いた。

「わー、やばい。こっちもやられたぞっ！」

言うまでもなく、辺りは大パニックに陥った。

熊やイノシシを仕留めるスラッグ弾は、ダンプの分厚いタイヤを難なく撃ち抜いていた。

慎一郎は、素早く次の二発のスラッグ弾を銃に込めて、残されたダンプの後輪を撃ち抜く。ダンプは、まるで巨象が崩れ落ちるかのように、さらに大きく傾いた。乗っていたほとんどの連中が、道路上に振り落とされる。男達は、わーっと叫び声を上げながら、そのまま福島方向に向かって一目散に走り出した。ダンプの運転手もUターンをしようと必死だった。ダンプの車体が、もがくように激しく揺れる。

「畜生、畜生―っ！」

絶叫を放つ吾朗が、護衛の組員によってキャデラックの車内に押し込まれ、急発進する。二台とも、ガタガタと大きく車体を左右に揺さぶらせながら何とかUターンし、県道を福島方面に戻り始めた。侵入者達は、必死の思いで地元方向へ逆戻りする。

一分ほど経って、やっとけたたましい爆竹音が収まった。

辰夫と桐島が道路に走り降り、通行止めの看板を急いで片付けた。それを林の奥で処分する。そして、四人の若者は二台のバイクに便乗すると、轟音を響かせてその場から走り去った。

辺りは何事もなかったように静寂を取り戻した。

二十五．重松の読み

翌朝―。

やや寝不足気味の阿部重松は、部下の担当課長から昨夜の結果報告を受けていた。

国道の検問が功を奏して、鏑木組は殴り込みを諦めたらしく、結局何事も起らなかったということだった。その報告は正しいだろうと阿部は自分なりに解釈していた。もし何かあれば、必ず工藤健吉から何らかの連絡が自分宛にあるはずだからだ。そして、昨夜それはなかった。

「何事も起らなくて、良かったな」

阿部がそう言って話を収めようとした時、課長が苦笑いをしながら報告した。

「昨夜は、他に通報が一件だけありました」

「何の通報だ？」
「県境の海沿いの辺りで、夜中に鉄砲の発砲音のようなものが聞こえたとの近所の住民からの通報でした」
「夜中にか？」
阿部は一瞬だけ緊張したが、部下の笑い顔を見てそうではないと悟った。
「一応、現場に見に行かせました」
「うん。で、どうだった？」
「そうしたら、道路一面に大量の爆竹花火が散乱していました。勿論、血痕なんてものはありませんでしたよ。念のために通報者の婆さんに詳しく話を訊いてみたら、案の定でした」
「案の定…？ その婆さん、何て言ったんだ？」
「そういえば、一緒にけたたましい何台かのバイクの音も聞こえたって言うんですよ。それで、ピンときました。おそらく、また…」
「ははは…、やっぱりそんなことか。おそらくじゃないな。まちがいなくだよ。最近の若い者は、すぐに都会の流行を真似したがるんだ。まったく困ったもんだ」
「例の、カミナリ族気取りですね」
「ああ、それだよ…。あらかた、大津工業の馬鹿どもの仕業だろう。若者の麻疹のようなもんだ。放っておけ」
阿部重松の鋭い「読み」は、半分だけ当たっていた。

二十六．旅立ち

東京・銀座―。
その日、近衛慎一郎達は銀座通りの路上の上に置かれたパラソル付の簡易テーブルのひとつに陣取っていた。
まるで、縁日の境内のように大勢の人が行き交う中、いくつものテーブルやベンチが路上に出されていた。歩行者天国という昨年から始まった東京の新しい風物詩であった。
「こんなものの、どこが旨いのかね？」
生まれて初めて口にするハンバーガーをパクつきながら、工藤辰夫が偉そうに文句を言う。
「ハンバーグには、ご飯が一番合うに決まっているだろうに。アメリカ人ってのは、何でも簡単に済まそうとしやがる」
「すみません。でも、工藤さんが、勉強の為に一番新しい東京の流行が見たいって言ったので…」
浅尾義和が、申し訳なさそうに謝った。
アメリカの有名なハンバーガー・チェーンが、日本に初めて一号店を出したのがこの銀座だった。注文してすぐに食べられるという手軽さが好評で、これからどんどん店舗を増やしていくとのことだった。
「辰夫。ご馳走になっておいて、偉そうに文句を言うな。それに、今喰っているのは、も

う三個目じゃないか」
　三上恵造が、笑いながら窘める。
「いいんだ、こいつは俺の子分だ。それに大金持ちだしな。このくらいのことは屁でもないさ。な、義和？」
「はい、どんどん食べてください」
　義和が嬉しそうに答えた。
　確かに、ハンバーガーを一度に十数個も買って振る舞うことができる義和は、大学生離れした裕福さだった。事実、彼の口座には九州の実家から常に大金が補充されるようになっていた。
　彼はこの春から学習院大学に進学し、東京で一人暮らしを始めていた。春休みにはすでに東京に住居を確保していたが、月のうちの数日は恵造の実家の友部町で過ごしていた。勿論、慎一郎達とクレー射撃に興じる為であった。その間、四人はほとんど一緒に行動していた。朝早くクレー射撃の秘密練習をして、昼間は自動車学校に通う。そしてまた、夜になると射撃場で練習に励んでいた。ただし、この一週間、慎一郎は義和の東京のマンションに居候していた。学習院大学の近くの目白駅前にあるアテネ・フランセという外国語学校の集中講座に通う為であった。無論、イタリア語の会話のクラスであった。
「ははは…。よしよし、それでいい」
　言いながら、辰夫が四個目を手にする。
「まったく、おまえってやつは。いったい、今日は何をしに東京までやってきたんだ？」
　恵造が呆れて言う。
「そりゃ、おまえ、決まっているだろう。慎ちゃんの見送りにさ。ついでに勉強を兼ねた東京見物だよ。な、慎ちゃん」
「どうだかな」
　慎一郎も、ハンバーガーを口いっぱいに頬張った辰夫をあきれ顔で見る。
　クレー射撃協会の理事を務める恵造の父、三上則夫の助力もあって、慎一郎はイタリアの銃の製造会社への就職が決まった。そして、今日がいよいよその出発の日であった。
「義和。羽田空港ってのは、ここから近いのか？」
　修学旅行以外茨城県をほとんど出たことのない辰夫が、義和に訊いた。
「近くはありませんが、電車とモノレールを乗り継いで一時間ちょっとでしょうか」
　すでに、九州と東京を飛行機で何度も往復している義和がいることは、一同にとって心強かった。彼はＭＪ社で射撃ができるチャンスがあると聞けば、その距離をもろともせずにせっせと飛行機で九州から出向いてきていたのだ。まさに、浅尾財閥の御曹司ならではのなせる技だった。
「そうか。今日は、モノレールにも乗れるんだな。空港に行けば飛行機も見られるしな。実に、楽しみだ」
「ははは…。何だ、おまえ。やっぱり観光気分じゃないか」
　恵造がからかう。
「それは誤解ってもんだぞ、三上。おまえは大学で機械何とかを勉強して、将来は鉄砲造りになる。で、俺の方はというと、観光業を勉強して、将来はそれで飯を食っていくんだ。だから、東京の風物もモノレールもすべて、その為の勉強なのさ。わかったか、わはははは

…」
「どうだかね。それに機械何とかじゃなくて、機械工学だよ」
恵造は目標の工科大学に合格し、今は義和と同じように大学のある東京で生活を始めていた。
辰夫は、水戸市にある観光会社に就職していた。慎一郎の父、近衛慎作の遺した二つの事業のうち、ビリヤード場は叔母の菊枝が続けることになった。観光業の方は、工藤健吉が会社をまるごと買い取ってくれた。慎一郎の留学の費用やイタリアでの生活費は、それで充分過ぎるほど賄えた。そして、辰夫は将来その観光業を継ごうと考えていたのだ。
「俺が、慎作さんの夢の続きを引き受けるんだ。水戸の会社での修行が終わったら、正式に慎作さんの会社を引き継いで、いずれは県内一の観光会社にしてみせるぞ。楽しみにしていてくれ、慎ちゃん！」
そう言って、辰夫が空を仰ぎ見た。
自分の言葉に酔った時にやる例のあのポーズだ。
「ははは…。期待しているぞ、辰夫」
笑ってごまかしたが、真っすぐな辰夫のその言葉に慎一郎は心を打たれていた。
「それから、辰夫に三上。大津港に帰った時は、できるだけ菊枝叔母さんの所に顔を出してやってくれ」
「ああ、勿論だ。言われなくても行くつもりだよ」
「助かる。それと辰夫、レオも頼むな」
菊枝はもとより、愛犬のレオとの別れは慎一郎にとっては辛いものであり、一番の心残りであった。
「勿論だ。まかせておけ」
一緒に住む菊枝は別として、レオが慎一郎の次に心を許しているのは辰夫であった。
もうひとつ、気がかりがあった。
「そう言えば、小名浜の鏑木の連中はその後どうだ？」
「あの一件以来、大人しいもんだ。鏑木の奴はすっかりやる気をなくしちまって、看板を下ろす話も出ているらしい」
「ははは…。この間の出入りで、相当懲りたか」
恵造が笑いながら、辰夫に訊いた。
「ああ。子分達が自分を置き去りにして一目散に逃げ出したのが、かなりショックだったようだ。あれ以来、子分達とはしっくりいっていないという噂だぜ」
「所詮は、「烏合の衆」だったってわけだ」
恵造が、納得した。
「ああ。親父と子分衆が一枚岩で結束しているうちの組とは、まるで違うのさ。わはは…！」
辰夫はそう自慢げに言うと、豪快に笑った。
「そいつはよかった。安心したよ」
そう安堵した慎一郎を見て、辰夫が急に笑うのをやめ、真顔になった。
「慎ちゃん。あの時は、本当にありがとうな」
「何だ、いきなり改まって」
「普段は、自分から厄介事に首を突っ込んだりしないタイプの慎ちゃんが、あの時だけは

親父の為に積極的に動いてくれた。へたをすると、命も危なかったのに。しかも、あいつらをこてんぱんにやっつけてくれた。この恩は、一生忘れないよ」

辰夫の太い眉の下の大きな目頭が、少し潤んだ。

「そんなにオーバーに考えるな。親父と俺がこれまで親分さんに受けて来た恩に比べれば、たいしたことはしていないさ」

そう言いながらも、慎一郎の胸中は複雑であった。

あの時、窮地に陥った親友の父親を何とか助けようと考えたのは、偽りのない事実だった。まして健吉は、それこそ自分の父親ともども公私に渡って面倒を見てもらってきた大恩人である。その恩返しであったことも事実である。

だが、理由はもう一つあった。父慎作への供養の為でもあった。それが起きたのは、まさしく慎作の葬式の日だった。その日、鏑木吾朗の名を聞いた時、神が与えた所業であると感じざるにはいられなかった。これが因縁でなくてなんであろうか。慎一郎は、父親の為に「けじめ」をつけるべきだと考えたのだ。そして宿敵・鏑木吾朗は、神に導かれるように海沿いの県道で待つ自分の元へやって来たのだった。

「さて。そろそろ、羽田の方に移動しましょうか」

テーブルの上のハンバーガーが綺麗に片付いたのを見て、義和が言った。

「ああ、そうしよう」

四人の若者が、銀座の雑踏の中にまぎれて行った。

了